



あゝ信州よ山の国 誇りは高しアルペンの
峯に輝く雪を以て 希望は高いや更に
さらば歌はむ諸共に 若き血潮のゆくまゝに
あした夕べの友は山 山は我等の姿なる
山は我等の姿なる

思誠寮々歌



第二チーム
マナンヒマール登山隊

小川ケルンから望むピサンピーク

I. ベースキャンプへ



カトマンズの(株)コスモトレックの広場で出発前の隊員の元気な姿を写真におさめる。



ブルブレまでバスで入り、荷物を降ろしキャラバン開始。



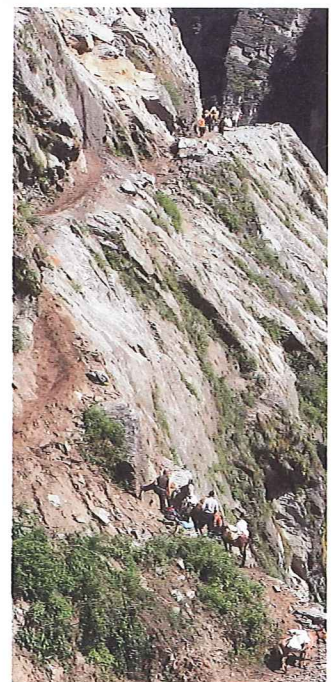
焼き鳥。



鶏運ぶ人。



我らがエースポーター、ダルビ・ラマ。



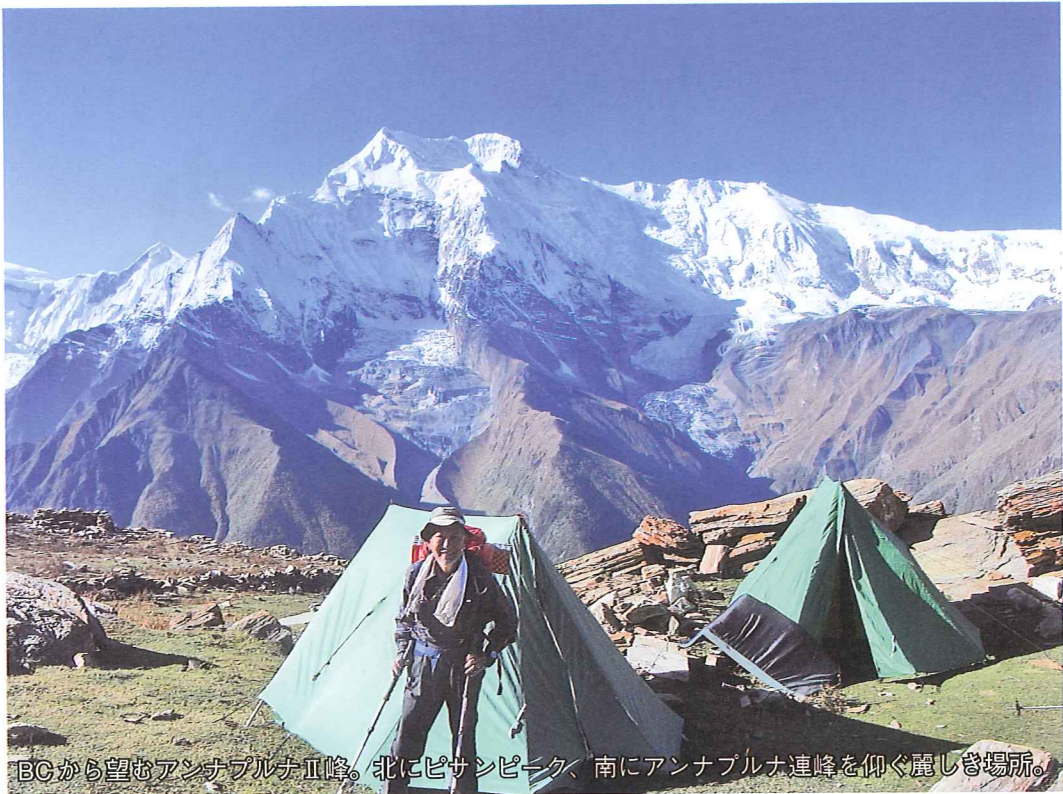
崩壊した道で、立ち往生する口バ達。



高所順応のため、くつろぐ隊員



黄昏の秋高原。



BCから望むアンナプルナII峰。北にピサンピーク、南にアンナプルナ連峰を仰ぐ麗しき場所。

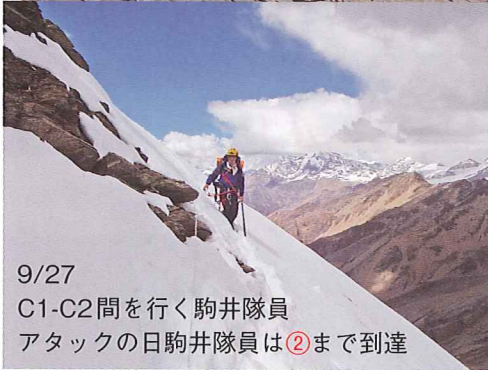


BCから約100m登ったところに、小川氏の遺骨を埋葬してケルンをたてた。アンナプルナがよく望める場所だ。大学旗とともに全員で写真撮影。

II. ピサンピークへ



⑥ 9/28 10:24 雪の斜面を直登



9/27
C1-C2間に行く駒井隊員
アタックの日駒井隊員は②まで到達



⑤ 9/28 8:14 岩稜バンドを
トラバースして右の雪の斜面へ出る



④ 9/28 8:20



9/27 C1を出発



③ 9/28 7:50 岩稜帯右を射上



9/26 キッチンスタッフに見送られて
BCを出発



① 9/28 C2 出発4:10



頂上直下 11:54



シェルパ達と山内
隊員 12:40



神野隊員到着
12:34



佐藤隊員到着
12:40



C2に帰還し隊員
と握手するシェル
パ 16:43



全員登頂 13:28



小林隊長到着 13:22



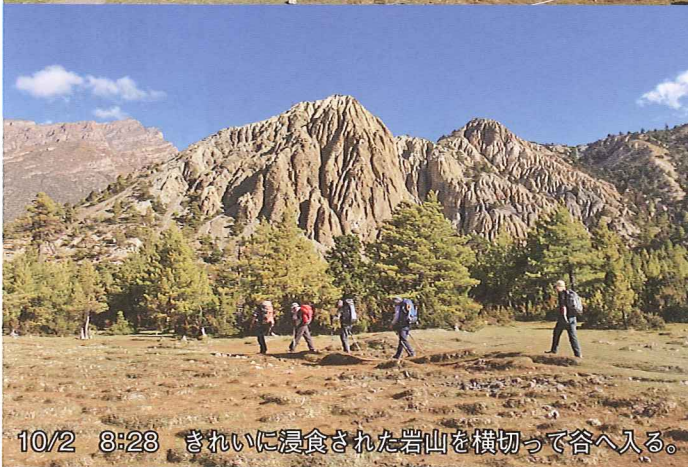
9/29 BCにて第三チームと合流。あつい祝福を受ける。



Ⅲ. チュルー遥か



10/2 8:04 フムデの村を出発 雪をかぶったチュルーファークの頂が見える。



10/2 8:28 きれいに浸食された岩山を横切って谷へ入る。



10/3 BCへの道 休憩



10/2 10:15 門柱のような2つの滝が見える辺りで幕営



10/3 15歳ポーター シャモウ・ラマ BCへ荷揚げ



10/4 霧の中BCを出発してC1へ



10/5 7:24 C1から望むアンナプルナII、IV峰



10/5 11:04 チュルーフアイースト
へ向かうFIX隊(シェルパ3名+山内隊員)



10/5 7:22 C1からチュルーフアイーストを背にして撮影



10/6 5:56 撤退を決定



10/6 7:04 撤退中



10/7 7:11 BC雪に埋もれる

10/7 ポッカ下山



アンダワ



ラムカシ

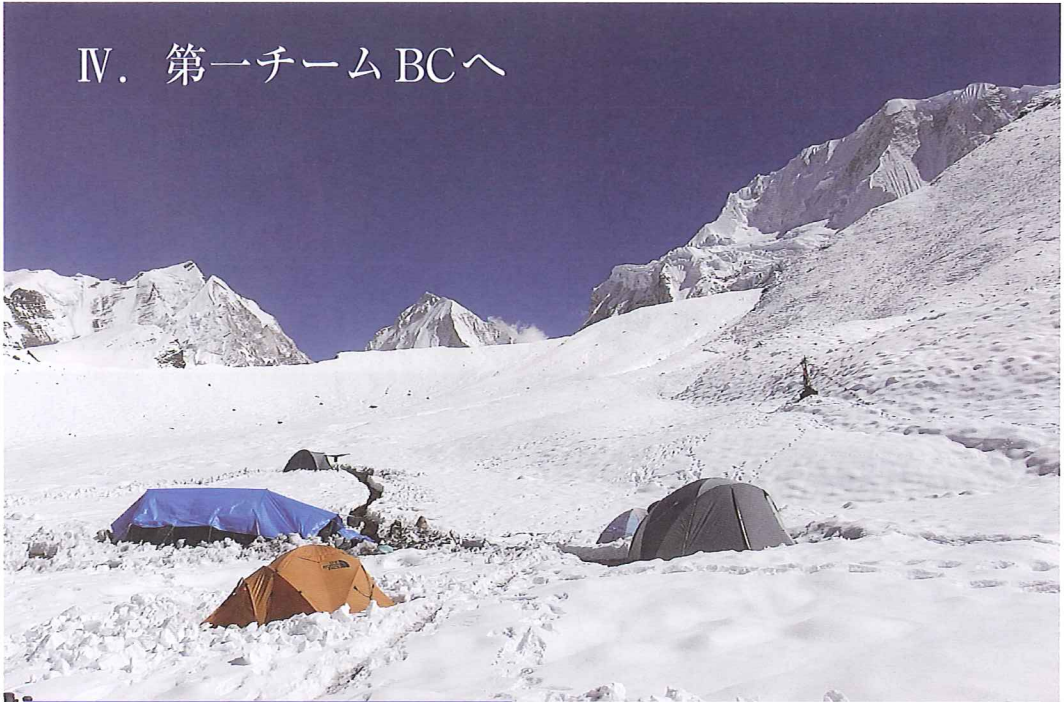


ディカタイ(右)と



10/10 コトにて 角谷・小林・駒井・神野隊員はヒムルンBCへ

IV. 第一チーム BC へ



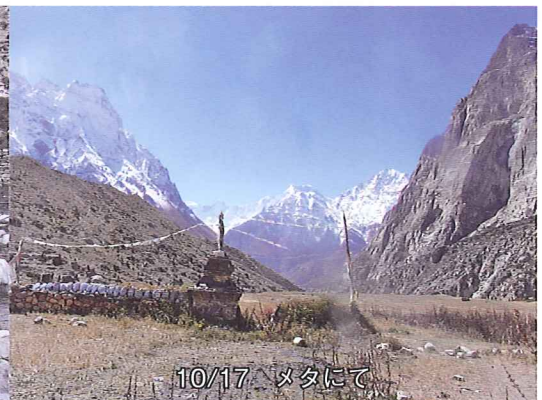
10/15 第1隊の帰幕を迎える。



10/14 初めての氷河。つついたり、かじってみたり、足でけてみたり、楽しいひと時であった。



10/13 朝目覚めると、テントの周りにヤクの大群



10/17 メタにて

行動総括

隊長 小林 元紀

はじめに

学窓を出でて40数年、山岳部でいそしんだ仲間たちはそれぞれの地域、職域で好きな山登りを続け、いちどはヒマラヤの頂に登ってみたいと夢に見ていました。そんな願望がかなえられる機会がやってきたのです。

信州大学創立60周年記念事業の一環として、学士山岳会記念事業の一つに60歳以上のメンバーがヒマラヤの山に登りたいという、わがままな希望を認めていただいたのです。先ずはこのことに深く感謝する次第です。

計画

中高年でも登れる可能性のある山として、マルシャンディー川沿いのピサンピーク(6,091m)、チュルーイースト(6,429m)、チュルーファーイースト(6,038m)の複数座を選定しました。この山域は我々の仲間たちが初登攀したギャジカン(7,038m)、ラトナチュリ(7,035m)などに近く様子の知れた地域であります。

登山方式は、隊員にかかる負担を極力軽くして安全登攀を第一との考えから、キャラバンを含めBC(ベースキャンプ)から上の荷上げ、ルート工作、FIXなどは原則ガイド主体で

行う。しかし、隊員も体力の余裕の範囲でガイドの工作に加わり、また、C1(第一キャンプ)、C2(第二キャンプ)のアタックエッセンは自分たちで行うことしました。

登攀活動を終了後は、班を二つに分けて、第1班はペリヒマール山域で活動中の第一チームの激励トレッキングをおこない、第2班はポカラに向かい第三、第四チームと合流して、小川追悼式典に参加するという計画にしました。

行動概要

この熟年登山隊の企画・立案は13年前、ラトナチュリ初登攀に参加した金子さんがその経験に基づいて綿密に作成していただき、内容はすっかりお任せでありました。その彼が出発直前に体調不良で参加出来なくなったことは誠に残念なことでありました。

カトマンズに着いてから、キャラバンを始めて一日の行動時間や宿泊サイト、ピサンピーク登攀に向けての高度順応の取り方、そしてチュルーへの移動、バックキャラバンへと計画書と大きな狂いも特段の支障もなく行動できたことは、金子さんのち密な計画のおかげと思っています。

ピサンピークはふもとからピークまで、休む場所を探すのに戸惑うほどきつい傾斜が続く山でした。標高5,400mのC2を出てFIXを頼りに急な斜面を雨降りのような音をたてて滑り落ちていく雪の音を朦朧として聞きながらろうじて登頂出来ました（途中駒井隊員リタイア）。C2へ戻ってもC1へ下る体力がありませんでした。翌日BCで奇しくも第三チームの皆さんの歓迎を受けて初めて登頂の感激が湧いてきました。

チュルーは高度順応なしでC1まで全身体調も好調で行くことができましたが、天候の悪化で撤退せざるを得ませんでした。わずかの晴れ間に山内隊員がガイドとFIX工作に加わって山頂直下まで行けたことが無念さに輪をかけた思いです。

総括

当初2座目指しましたが天候の悪化で1座（ピサンピーク）になりましたが長年の願いがかない大変満足しています。ただ、がん治療中の駒井隊員には、世の同じような人たちの励みになるべく是非ピークにと皆で話し合っていました。アタック途中で断念せざるを得なかったことが大変心残りでありました。

60歳を優に超えた者たちは口は達者ですがそれに体の動きが伴わず、そこを若い山内隊員がこまめに動いてく

れたことで大いに助かりました。パソコンを使っての衛星通信連絡や写真撮影、ガイドとの些事のやり取りなど隊の運行が大変スムーズに運びました。

ピサンピークについては、キャンプを2つ設けたことが成功の要因であったと思います。要求を受け入れてくれたサーダーに感謝であります。標高4,000m以上ともなると、一日に高度差1,000mを超える登降は我々には無理でありました。

チュルーは高度順応なしに体調に支障なくBC、C1に入れましたが、フィックス作業の日程を予定しておくべきであったと思いました。

登攀終了後、第一チームBCを訪ねました。第一線で活躍する人たちの緊張した雰囲気を感じられ大変よい経験をさせてもらったと思っています。

おわりに

今回の山行を理解してくれた家族はもとより、60周年記念事業として企画、立案にかかわられた多くの関係者には感謝の気持ちでいっぱいであります。また亡くなられた小川先輩の熱き思いに少しはお応えできたかと思っています。

今後、この会の中から引き続き熟年登山隊が出てくることを願っています。

行動記録

駒井 浩、神野 国昭

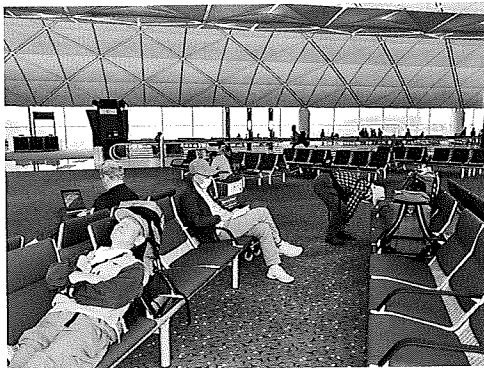
・9月13日（日） 日本出発

11：20 関西国際空港出発 台北経由

16：00～19：00（香港時間） 香港空
港

21：30（ネパール時間） カトマンズ
空港着

小林、神野、山内、駒井の4人は、友人・両親・夫人・子供・孫等の見送りを受けて関空よりカトマンズに向かう。途中、台北空港で我々4人を残して乗客全員が下りてしまったときは驚いた。そして、出発する時にはその席が全て埋まったときにも驚いた。香港空港で、成田空港からの佐藤隊員と合流する。これでメンバー5人が揃った。



香港空港にて乗継時間調整

カトマンズに着くと出迎えを受け、コスモトレックに向かう。大津さんと打合せ後ホテルに落ち着く。

・9月14日（月） コスモトレックに
て梱包作業 天気 曇

6：00 起床

7：00 朝食

10：00～15：00 装備点検、梱包

18：30 夕食

コスモトレックで、ガイド4名（ラムカジ・タマン、アンダワ・タマン、ダワ・タマン、ティカ・タマン）とコック（ミンマ・タマン）を紹介される。

彼らは過去の我々信大の遠征隊や佐藤隊員とのつながりがある、親近感を覚える。

倉庫の床にブルーシートが敷かれ沢山の野菜がならべてある。

我々のキャラバン用の食材とか、少し乾燥させることで日持ちがよくなるのだそうだ。

事前に送ったプラパール4箱はいか



コスモトレック倉庫内に広げられた我々の食材。

にも多すぎるとのきついご忠告、現地
で準備されたものとのダブリもあった
りして、結果2箱弱の荷物を残すこと
になった。

半分はトイレットペーパーである。
日本で高級な品を購入して包装をと
って中の芯を抜いて一つずつビニール袋
に包み直すという大変手間をかけた物
が置いていく羽目になるとは！

・9月15日(火) カトマンズ出発

天気 曇りのち晴

5:30 起床

6:30 出発

10:30~10:56 ム布林で昼食

12:50 ベシサハール通過

14:07 ブルブレ到着 標高840m

19:10 夕食

20:30 就寝

喧騒のカトマンズをバスで出発。途
中何度か意味不明の停車。なかなか街
を出られない。途中で子供と思しき
10数名が乗り込んでくる。スクール
バスの代行もするのかと思ったが、彼
らがポーターとはびっくりした。荷物
もあるため満車となる。ポーターの中
には手ぶらのものも多い。

ベシサハールからの道は所々崩れて
おり大変な悪路である。何度か川に落
ちそうになり生きた心地がしない。今
回の山行で一番の危険ヵ所だったと思
う。

ブルブレに着いて一安心、テントを

張って、個々に滝見物や、屋台で観光
地図を購入したりのんびりとした一時
を過す。20時頃夕立がきた。

・9月16日(水) ブルブレ→シャン
ゲ 天気 晴

6:00 起床

7:55 出発

11:35~13:25 滝の下で昼食

15:30 シャンゲ着 標高1,100m

19:00 夕食

20:30 就寝

今日からキャラバン開始。本来の
キャラバンルートはマルシャンディ川
の左岸であるが、右岸に車道が建設中
でありこちらのルートは2時間ほど短
縮できるとのこと。時々屋根まで人
であふれたジープとすれ違いながら暑い
あついキャラバンが始まった。

ポーターが遅れたとかで今日はシャ
ンゲで泊まる。水力発電所の太い鉄管
に涼しそうに水滴が付いている。小屋
の食堂のビール瓶にも涼しそうな水滴
が…登頂までは酒を断とうと金子さん
と誓ってきたが初日で禁を破りビール
を注文！

ここはテントを張る場所がないので
バティー泊まり。

今日の行軍は、午後になって風が少
しあったのが救いだっただ。鉄管上部の
発電所取水口を見に行く。取り入れる
水はわずかで残りは溢れて見事な滝に
なっている。



・9月17日（木） シャンゲ→タール

天気 晴

6：00 起床

7：55 出発

9：35 ジャガット通過

10：45 チャムチェ通過

11：25～12：55 昼食

13：45 シャッタレ通過

15：55 タール着 標高1,700m

19：00 夕食

21：00 就寝

今までマルシャンディ川をはるか下に見てキャラバンしてきたが、今日のタールはその川の洲にある村。大水が出たら浸水しそうなところである。今日は風もなく暑かった。今日の泊まりはテント。



タール到着

・9月18日（金） タール→ダナキュ

天気 晴

6：00 起床

7：45 出発

10：00 コトロ通過

11：10～12：55 グラパニで昼食

14：20 ダナキュ着 標高2,300m

18：15 夕食

20：00 就寝

今日も風がなく、暑い一日であった。

タールをでてしばらくは河原の平坦な道をロバと前後して進む。マナスルトレックルートとの分岐点グラパニで昼食。

スラーヤによる通信は快調である。

20：00頃夕立が来る。今日の泊まりはテント。



吊り橋を渡るロバ

・9月19日（土） ダナキュ→コト

天気 晴

6：00 起床

7：55 出発

9：20 テイマン通過

10：45 サンチョク通過

11：50 コト着 標高2,600m

19：00 夕食

20：30 就寝

サンチョクは河岸段丘の平地に麦とソバが豊かに色づいていた。

今日は半日行程。午後は寝袋や衣類

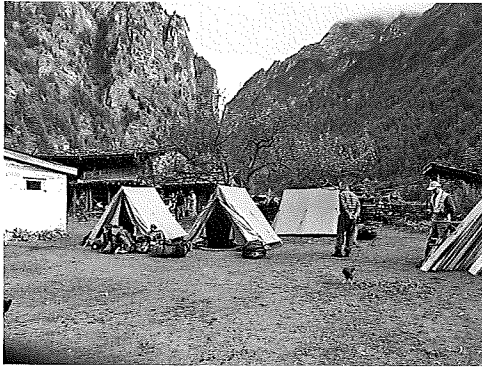
を干し、休養。ソーラーパネルを広げてスラーヤの充電を行う。そのパネルの上にニワトリがフンをしていく。牛がテントの入り口にフンをしていく。夜中に耳元で馬の鼻息を聞く。

彼らのテリトリーに我々がテントを張ったのだ、仕方がない。

コトはナルコーラとの分岐の村。帰路には、このナルコーラからプーコーラを遡上してペリヒマール隊BCヘトレッキングする。個人装備の一部デポ。

コスモトレックから第一チームのBCの場所がヒムルンからギャジカンに変更されたとの連絡入る。

夜中雨が降る。今日の泊まりはテント。



コトのテントサイト

・9月20日(日) コト→ピサン 天気 曇り

6:00 起床

7:50 出発

8:15 チャーム通過

9:25 タレク通過

10:50~12:20 プラタンで昼食

13:55 デュクレポカリ通過

15:10 ピサン下村到着 標高3,200m

19:00 夕食

20:30 就寝

昨日、山内隊員がサイフを粉失。銀行カード類のストップ手続をチャームのインターネットで行うがうまくつながらない。

スラーヤで直接日本の銀行に電話を入れ手続を進める。

デュクレポカリを過ぎる頃から、目的のチュルーとピサンの一部が見える。

下村に着いてピサン用とチュルー用の装備の振り分けを行う。

泊まりは、バティー。



スワールガドワリダンダ

・9月21日(月) 高度順応 天気 晴れたり曇ったり

6:00 起床

9:00 出発

12:55 ピサンBCの少し手前

14:55 ピサン上村のゴンパ見学



15:25 ピサン下村帰着

19:00 夕食

20:30 就寝

今日は高度順応のため空身でピサンBC近くまでを往復。高度差1,000mの上り下りは大変きつい。登ってもものぼってもさらに急な登りが続いている。平らなところがない。どこまで行っても牛の糞が沢山ある。

高度が上がるにつれ、高山植物がたくさんあり美しい。時々アンナプルナII峰とピサンピークが顔を出す。

ピサン上村では麦刈りの最中である。ラマ教寺院ゴンパに寄って安全登山祈願行う。

皆の血圧が異常に高い。最低血圧が100前後、新谷ドクターにスラーヤで問い合わせ、高山ではその位になるとの答えに一安心する。

泊まりはバティー。



ラマ経の経文が書いてあるというタルチヨの下で

・9月22日（火） 休養日 天気 晴れのち曇

5:40 起床

20:30 就寝

明日からの登攀に備え今日は休養日とする。一日中のんびりする。

BGANをセッティングしてパソコン通信をする。こういう事は若い山内隊員がみんなやってくれて年寄りは大いに助かる。

この時期麦刈りがたけなわである。ガイドの一人が手伝いかアルバイトに行った。

今夜も昨日と同じバティー。



ソーラーパネルに村の子どもが集まってくる。

・9月23日（水） BC入り 天気 曇

6:00 起床

7:00 朝食

8:05 出発

12:30 BC着

13:50~15:30 高所順応のため約4,400m地点を往復

20:30 就寝

昨夜、標高5,000m位から上部は新

雪が積もった。

今日はいよいよBC入り。昨日の最高地点から100mほど登ったところがBCであった。ここだけがわずかに平らな場所であるが、水場はだいぶ下まで行かねばならないようであった。我々が3張のテント、ガイドが1張食事テント、炊事テント、それとトイレテントと合わせて7張のテントを設営登山基地の雰囲気が出てきた。われわれは、高度順応のためさらに足を伸ばした。前面にアンナプルナⅡ峰、背後にピサンピークを望む場所で故小川勝氏の遺骨を埋葬しケルンを積んで、氏を偲び、この記念事業への祈願を行う。ここはアンナプルナ展望コースといわれるだけあってⅡ峰が正面に見事に望める絶好の場所である。

この高度になると、さすがに血中酸素濃度が20くらい下がっている。



BC設営完了。みんな元気！

・9月24日（木） 高度順応
天気 晴

6：00 起床

7：00 朝食

8：30 出発

12：30 C1予定地着、荷物一部デポ

15：50 BC帰着

20：30 就寝

草付を登りつめて大きなガレ場を左にトラバースするとちょっとした平地に出る。標高4800m、ここにテントを張り個人装備（腰道具、アイゼン等）をデポする。

佐藤、神野、山内は5,000m付近まで足を延ばす。標高4,900m付近で新雪を踏む。



草付きの斜面をBCに下る。前方は対岸の山

・9月25日（金） BCで休養 天気
晴一時雨

7：00 起床

8：00 朝食

20：00 就寝

今日は休養日。このところ天気は毎日「晴のち曇（ガス）一時晴」だが、傾向としては悪化しているように思える。



ラムカジ・サーダーとアタックの行程を打ち合わせ。当初の5,100mAC(アタックキャンプ) 1つでは我々の体力では山頂をねらう事は出来ない。キャンプをもう一つ設営するよう交渉。

26日は4,800m地点にC1設営2張り、ガイドはBC泊、27日5,400m地点にC2設営、ガイドは5,100m地点にHC(ハイキャンプ) 幕営、28日山頂アタック、C1またはBCに帰幕という案で進めることとした。

アタックのための団体装備、個人装備再点検。



BCからアンナプルナを望む

・9月26日(土) C1へ 天気 快晴

6:00 起床

7:00 朝食

8:15 出発

12:05 C1着 標高4,800m

13:25~15:40 高所順応を兼ね、5,100mのHCまで荷揚げ

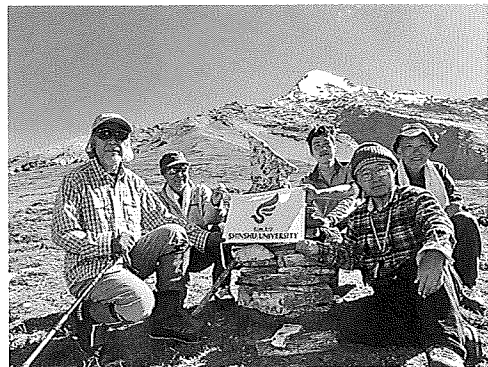
20:30 就寝

今朝BCで初めて霜がおりた。小川

ケルンを通して登る。この高度になると足が重くてなかなか高度が稼げない。登っても登っても急な草付きの斜面が続く。草付きはC1の下部で終わり、がれ場となる。C1で休憩後明日のガイドのテント場HC付近まで往復。ガイド4人はBCに戻る。



BCでサーダーが安全登山祈願



小川ケルンでピサンをバックに登頂を誓う

・9月27日(日) C2へ 天気 晴

5:50 起床

7:00 朝食

8:40 出発

10:10 HC着 一部デポ
13:35 C2着 標高5,400m
14:30~ 高所順応のためそれぞれに
上部往復
20:30 就寝

夜半、わずかではあったが雪と霜が降り、テントがバリバリになる。

HCでストックをデポ、アイゼン、ピッケル、腰道具を着ける。ガイド3人はC2建設とFIXに向かう。

C2は我々の2張りが限度といった余裕のないテント場である。

全員激しい高度障害は無かったがとにかく食欲がない。



C1からC2へ!

・9月28日(月) ピサンピークア
タック 天気 晴のち曇時々雪

1:30 起床
2:00 朝食
4:10 出発
7:00 駒井リタイア
12:30~14:00 順次登頂
16:30 C2着

ガスバーナーで雪をとかして湯を沸

かす。食欲がなくスープ1杯を飲むのがやっとである。

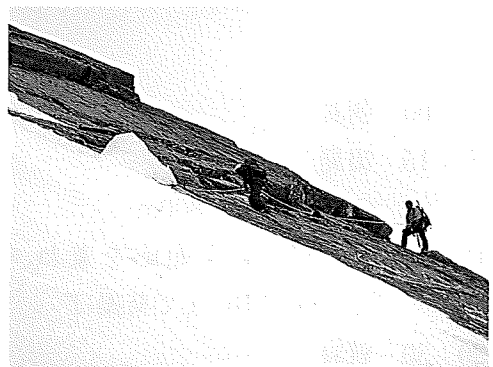
HCからのガイド4人の到着を待つて、完全装備で出発。電池の明かりを頼りに所どころ雪に覆われた急な岩稜帯を登る。

2時間程登ったところで駒井隊員、足があがらないといってリタイア申出、残念。

明るくなって、岩稜帯を右に巻いて急な雪面の登りに入る。天気は雪とあられの混じったようなものが降ってくる。雪面を音をたてて落ちていく。

FIXを頼りに一步一步登る。

前の人1人が1スパン登りきるのを待つて次の人が登る。待っている間に次の人は寝てしまう。そしてトップとラストの間がどんどん開いていく。山頂では2時間位の差がついたようだ。ガイドが良くがまんして待つてくれた。山頂はガスっており展望がきかない。長居は無用、アッセンダーをエイト環に付けかえて下る。C2に戻ったがC1へ



岩稜を巻く。



必死にFIXにしがみつく。



後ろは大分遅れている。



登頂！ ガイドに感謝！

下る体力・気力もない。

夕食は2つの汁麺を3人で食べるのがやっとであった。

・9月29日（火） 晴

6：00 起床

7：00 朝食

8：00 出発

9：35 C1通過

13：00 BCにてアンナプルナトレッキング隊に迎えられる。

15：30 ピサン下村着

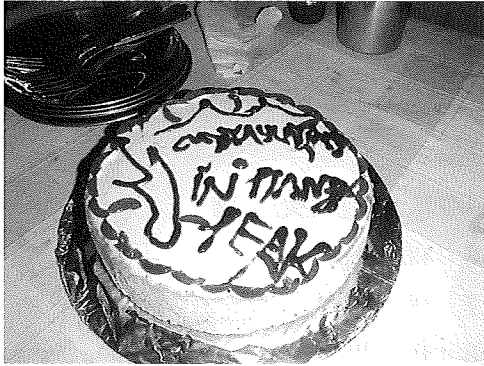
C2、C1を撤収、BCを目指す。

途中、下から「アラヨー！」の声！なんと第三チームの池内・大沼の2隊員が登ってきてくれた！ 感激！一緒に小川ケルンに寄り登頂報告。

BCでも第三チームの松尾隊長以下沢山の人が登頂を祝ってくれ実感が湧いてきた。その後、ヒムルン隊の角谷隊員が本職のガイドとしてお客さんを連れて登ってきた。BCが信大一色になった。後を彼に引き渡して全員でピ



小川ケルンにて、第三チーム先発の歓迎受ける



コックが登頂祝いのケーキを作ってくれた

サン下村に下る。

今回はじめて、フムデの空港の飛行機が飛んでいるのを見た。需要が少ないのか？ 天候待ちしていたのか？

久しぶりにバティー宿泊。

・9月30日（水） 晴

7：00 起床

8：00 朝食

9：00 出発

11：10～13：10 アンナプルナⅡ峰

BCにて慰霊祭

14：35 ピサン下村帰着

朝一番BGANをセットして松崎Gに登頂報告を行う。

第三チームと合同でアンナプルナⅡ峰BCに行き、ケルンを積んで慰霊祭を行う。宇都宮僧侶の読経でござかににとり行われた。

今日は休養日であったがよい足ならしになった

夜はピサン下村で第三チームが我々の登頂を祝って盛大な食事会を催して

くれた。

・10月1日（木） ピサン→フムデ移

動 天気 晴

6：00 起床

7：00 朝食

8：00 出発

10：10 フムデ到着 標高3,280m

今日はフムデへ移動、平坦な楽しい2時間ほどのキャラバンであった。

テント場でチュルーアタックの装備点検やBGANで日本の情報をパソコン通信で楽しむ。

バティーの裏の草地でテント泊まり。



路傍の花

・10月2日（金） フムデ→ヤクカル

カ 天気 快晴

6：00 起床

7：00 朝食

8：00 出発

9：05 ジュル通過

10：15 ヤクカルカ到着 標高約3,700m



飛行場の脇を横切ってマルシャンディ川を渡り、支流沿いの道を進む。日本の溪流を思わせるような谷川沿いを2時間ほど進んだら今日はここまでだという。

サーダー曰く「今日これより上部へ登ると、ポーターが下りることができなくなり、寒さがきつすぎる」と。今日はBCに入るつもりでいた我々は大いに戸惑う。確認不足であった。

中途半端な位置で一泊となる。



フムデからチュルーへ、マルシャンディ川の吊り橋を渡る。

・10月3日（土） ヤクカルカ→BC

天気 曇後雪

6：00 起床

7：00 朝食

7：36 出発

12：30 BC到着 標高約4,700m

放牧路とおぼしきジグザグの急な灌木の斜面を、左手に2本の滝を見ながら登る。高度が上るにつれて、ガスって来て地形が読めなくなる。左に大きく巻いて川沿いのBCに着く。

いくつもテントが張れそうな広いテント場である。

昨日頑張れば来られたと思い、一日損をした思いである。



2本の滝、BCはこの上

・10月4日（日） C1へ 天気 雨、みぞれ

6：00 起床

7：00 朝食

9：20 出発

12：30 C1（標高約5,350m）到着

積雪約10cm位。一面ガス何も見えない。様子を見て少し遅く出発。

ガイドは、イーストとファーイーストのFIX工作に向かうが、ファーイースト隊はホワイトアウトのため目的を達せず。

我々も途中ルートを見失う。昼過ぎ氷河湖畔にC1を設営。

ガイドは火器の燃料不足気味なのでBCまで下る。

スラーヤでの情報 5、6、7日は天気良いとの報！



氷河湖のほとりにC1を設営

- ・10月5日(月) 沈殿 天気 晴
- 10:00頃 ガイド到着
- 10:30頃 FIX隊(ガイド3名+山内
隊員) 出発
- 15:25 FIX隊帰着

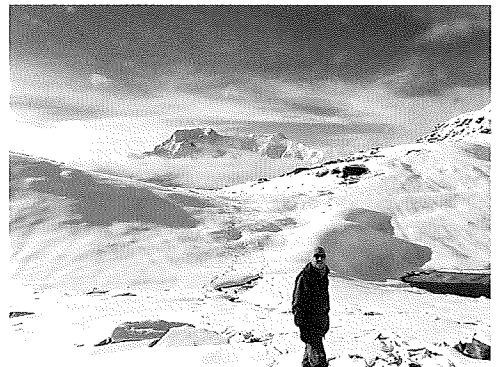
夜来の小雪、5時サーダーにトランシーバーで連絡、BCも天気は悪いとのこと。明るくなるにつれ青空が出て稜線も見えてくる。

ガイドたちはゆっくり登ってき、イーストを中止してファーイーストにしぼって行きたいと言う。了解! というわけにもいかず、佐藤・山内隊員と相談。日本の金子さんにスラーヤで天気予報確認する。予報は変わって、早めに悪化すること、ファーイーストにしぼって明日にはBCに戻るよう松尾総隊長からも指示があるとのこと。

皆で相談の結果佐藤・山内隊員にはイーストを諦めてもらい明日全員でファーイーストアタックすることで意見一致。

ガイドに山内隊員も加わってファーイーストのFIXに向かってもらう。頂上直下200mまでFIXして15時過ぎ全員帰幕。

天気は少しずつ雲が出てきてみぞれも混じってきた。



C1にて、バックはアンナプルナII、IV峰

- ・10月6日(火) C1撤退 天気
雪
- 2:45 起床
- 7:50 出発
- 8:30 BC到着

夜来の雪20cm以上の積雪、天気が早めに崩れたようである。



昨夜来良く降った。



稜線では雪崩の危険あるとのこと、
残念ながらチュルーをあきらめ、下
山。

・10月7日（水） BC撤収 天気
雪後雨

6：00 起床

7：30 出発

11：55 フムデ到着

15：00 山内隊員・ガイドフムデ到着

夜中、何度かテントの雪を中から叩
いて落とす。エッセンテントがつぶさ
れた。明るくなって見ると50cm位の
積雪。雪崩の恐れが出たため雪の中を
急遽BC撤収。

小林、佐藤、神野、駒井の4人は個
人装備のみ担いで雪と雨の中フムデに
下る。

BCのテントなどの装備は、ポーター
が雪で上がってこれないのでシェルパ
と山内隊員が数回ピストン輸送して下
ろした。彼らは数時間遅れてフムデに
着く。全員無事撤収できた。



BCでも大雪に見舞われた。

久しぶりにバティーに泊まる。

・10月8日（木） フムデ→コト 天
気 晴後雨

5：00 起床

8：10 出発

10：20 ピサン下村通過

11：45～13：25 デュクレポカリで昼
食

14：35 ブラタン通過

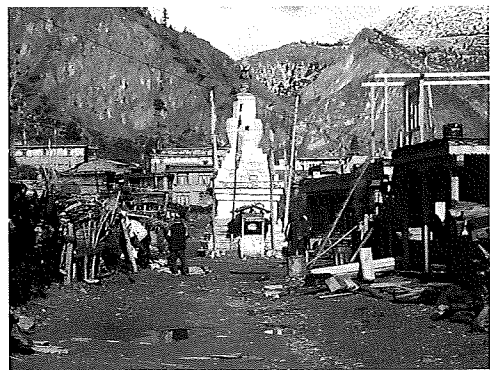
16：10 チャーメ通過

16：55 コト到着 標高2,600m

今日はコトまで長い行程であった。
途中何箇所か道路や橋の決壊があっ
た。下でもかなりの雨が降り被害がで
たようである。

コトで再び角谷隊員と遭遇する。ナ
ルコーラでも豪雨で決壊がありロバヤ
ポーターが進みたがらないという。
我々と一緒に行動することにした。

明日2人のガイドが下山するので、
ガイド、キッチンスタッフ、ポーター
全員にチップ！



フムデのマニ車

テント場も宿も満員、なんとかバティーに泊まる。

・10月9日（金） 休養日 天気 晴
後雨

6：00 起床

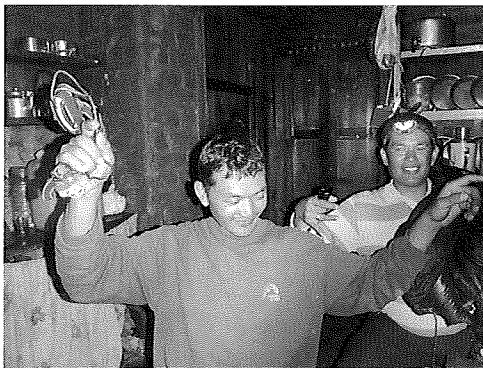
7：00 朝食

休養日。

濡れたものを干したり、第一チームBC訪問用装備の点検を行う。腰道具など不要なものは明日帰る組にコスモトレックに届けてもらう。

明日からは、第一チームBC訪問組（小林、神野、駒井）と故小川勝追悼トレッキング合流組（佐藤、山内）に分かれる。

夜、満員につき我々はバティーからテントに移される。



Resham Fiririを歌って揃ってお別れのパーティー。

・10月10日（土） コト→メタ 天
気 晴後曇

5：50 起床

7：00 朝食

7：45 出発

15：15 メタ到着 標高3,560m

今日から3人とガイド1人、ポーター4名それと角谷隊員と彼のポーターでナルコーラ、プーコーラを経て第一チームBCを目指す。こんな狭い谷にも道はある。が、今までと雰囲気がガラッと違う。

こちら側には、マニ車がない。メタは、バティーの建設ラッシュであった。チェックポストの警官は愛想がない。このところ、雨が結構多かったが、今日は降られなかった。

今夜はテント。



朝、コトのキャンプサイトにて全員揃って。これから別々に行動

・10月11日（日） メタ→キャン

天気 晴

6：30 起床

7：00 朝食

8：00 出発

10：55 チャコ通過

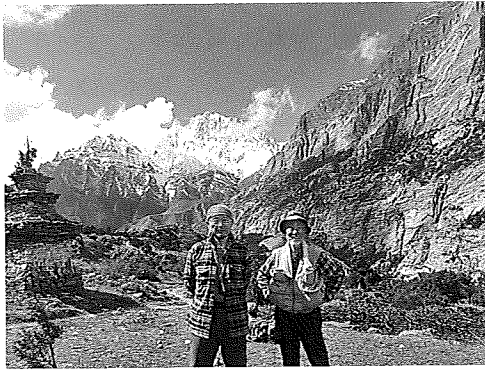
12：30 キャン到着 標高3,820m

メタはピサンピークの裏側に当た

る。ここから見たピサンピークは大変
険しい山に見えた。

キャンは廃村になったようなさびれた村である。が、今日は数パーティーがキャンプしている。彼らはキッチンテント、食事テント、トイレテント、それに1人一張りのすべて真新しいテント。我々とは大違いである。

第一チームから13日に1次アタックするので角谷隊員に早く合流するようにとの連絡入る。



メタにて、バックはピサンピーク

・10月12日（月） キャン→プーガオン 天気 晴

6：00 起床・朝食

7：05 出発

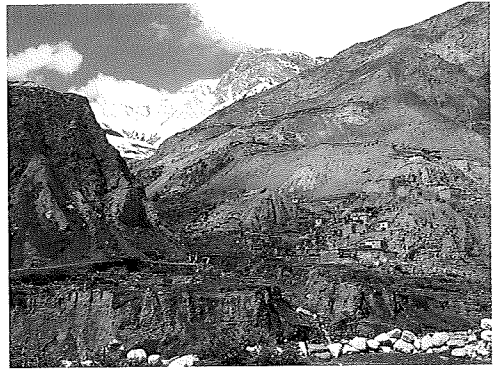
10：30 プーガオン到着 標高4,080m

角谷隊員の早朝出発につられて我々も早く出発する。

プーガオンで角谷隊員と分かれる。

我々は半ドン！ 左岸のバティエの横にテントを張る。

対岸のプーガオンは石を積み上げた要塞のような集落にみえる。凄惨な印



プーガオンの集落

象！

バティエの竈の天井に吊るしてあったヤクの干し肉を炒めてもらいロキシーを飲む。大変な美味であった。

・10月13日（火） プーガオン→第一チームBC 天気 快晴

6：30 起床

7：00 朝食

8：00 出発

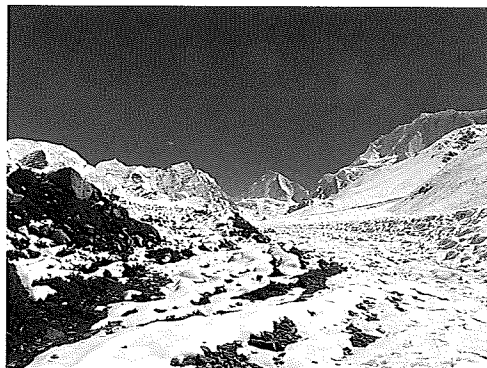
13：25 第一チームのBC到着

朝、テント場横にヤクの親子が集結していた。

踏み跡を探しながらBCをめざす。

天気快晴で、景色もヒマラヤの峰々が間近に見え楽しいトレックである。雪が深くなり足取りも重くなかなかBCが見えてこない。13時過ぎ藤松、滝沢隊員に迎えられてBCに着く。BCは雪原の真っ只中であつた。ヒムルン1次隊田辺、大木、江川隊はC2へ、2次隊角谷、花谷夫妻隊はC1に入ったとか。今日のBCは我々3人と藤松、

滝沢の5人で過ごす。シェルパにお任せの我々のBCと、自分たちですべてこなしていく隊とは緊張感が違う。



BCに向う。ネムジュンとギャジカン

・10月14日（水） BC 散策 天気快晴

7：15 起床

8：00 朝食

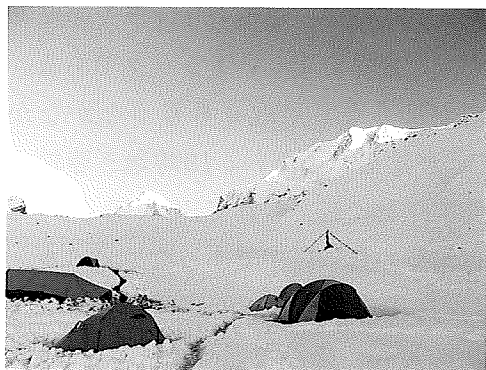
10：21 「ヒムルン登頂成功」の知らせ入る

10：45 出発

11：35 氷河に降り立つ

12：20 BC帰着

双眼鏡で1次、2次隊の動きを追う。



BCの朝、快晴

10時過ぎ1次隊のヒムルン登頂成功の知らせがトランシーバーに入る。全員で歓声！

藤松隊員の案内で氷河散策に出かける。3人とも、ヒマラヤの氷河は初めてであり、感動する。

・10月15日（木） BC 停滞 天気晴

7：00 起床

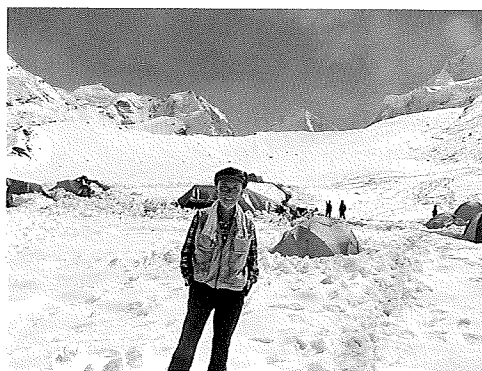
8：00 朝食

11：54 「第2次隊、ヒムルン登頂成功」の知らせ入る

今日もよい天気。よく冷え込んだ。7時過ぎテントに日が差してくる。

10時過ぎ1次アタックの田辺隊が戻ってくる。みんなで迎える。

そして昼前に2次アタック隊の登頂の報がトランシーバーに入る。昼食を兼ねロキシーで乾杯。夜、2次隊がC1に戻れずビバークの報、明日早く田辺、大木で支援に行くことにして早く就寝。



BCにて、日中は暑いくらい！



・10月16日（金） バックキャラバン
天気 晴

7:00 起床

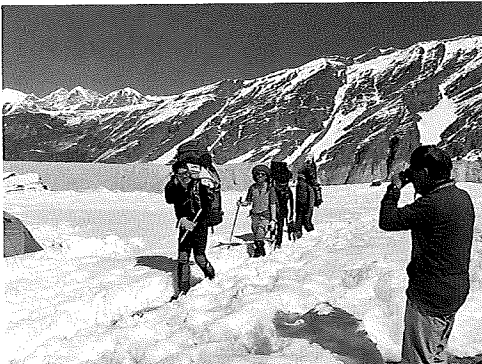
8:00 朝食

13:05 出発

16:00 プーガオン到着

7時田辺、大木隊員の出発を見送る。その後トランシーバーに2次隊の元気な声が入って安心する。昼過ぎ2次アタック隊が帰幕、全員で記念写真を撮り、我々はBCを後にする。

今日からは、小林、神野、駒井に加えて滝沢、江川の5人でカトマンズまでバックキャラバンする。



ヒムルン登頂隊元気に帰幕！

・10月17日（土） プーガオン→メ
タ 天気 晴

6:00 起床

7:00 朝食

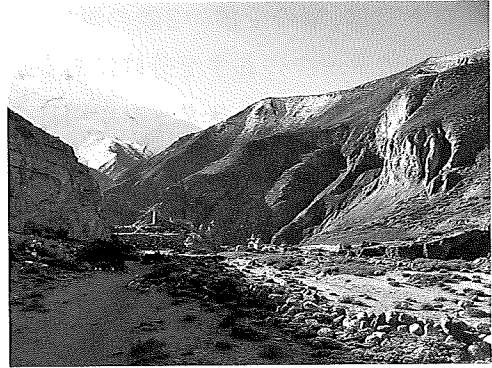
7:55 出発

11:00 キャン通過

13:25 ジュナム通過

15:25 メタ到着

天気は快晴。5人そろって楽しい



プーガオンの朝

キャラバンが続く。

・10月18日（日） メタ→コト 天
気 晴

6:00 起床

7:00 朝食

7:40 出発

9:00 ダルマサラ通過

15:05 コト到着

途中橋のたもとに温泉の表示。50℃
以上はあろうかと思う。



裏見の滝

コトでは、宿の子供の2歳の誕生日。お祝いのケーキのおすそ分けにあずかる。また、キッチンスタッフが明日の朝まででお終いのため、そちらからもケーキが届く。コトを出てからずっとテント泊まりであったが、今日はパティー泊まり。

・10月19日（月） コト→タール

天気 晴夕方小雨

6：30 起床

7：00 朝食

8：05 出発

9：05 タムチェ通過

10：05 テマン通過

11：15 ダナキュー通過

11：55～13：10 バガールチャップ昼食

13：40 ダラパニ通過

16：30 タール到着

トレッカーは欧州の人が多い中で、今日は珍しく2組の日本人と出会う。ダラパニであった組は長野市麻績の人であった。

この街道を下る人は少ないのかもしれない。このルートも何箇所か道路や橋の決壊があった。タールの手前左岸の山が崩れ下の畑が壊滅状態であった。ここも大雨であったようだ。

タールでは、ちょうどお祭りの最中で夜11時頃まで騒々しかった。

今夜もパティー。



マナスル遠望

・10月20日（火） タール→シャンゲ

天気 晴

6：00 起床

7：00 朝食

7：45 出発

11：25～13：05 ジャガットで昼食

14：20 シャンゲ到着

シャンゲの手前で道路が崩れており、復旧作業のため対岸を大きく迂回させられる。

シャンゲが混んでいて予約できな



チャムチェの200mを超える滝

かったため、少し手前のバティーに泊まる。チキンモモで一杯やる。注文してから庭にいるニワトリを捕まえて、羽をむしり、骨を叩く音が聞こえてくる。なかなかテーブルに上がってこない。

道路を隔てた山肌に昼間は猿が出没し、夜は蛍が乱舞していた。



はるか日本に向かって遙拝

第三チームの寺田副隊長が関空から自宅に向かう列車の中で亡くなられたとの悲報をスラーヤで受ける。大変なショックで言葉にならない。夜の蛍の乱舞に靈魂じみたものを感じる。

・10月21日（水） シャンゲ→ブルブレ 天気 晴

6:00 起床

6:30 朝食

7:10 出発

7:35 シャンゲ通過

12:15 ブルブレ到着

キャラバンも最終日となった。

今日もよい天気！ 11時ちょっと前、日本時間14時、京都で寺田先輩の葬儀が執り行われている時間、全員で遙拝する。合掌。

ブルブレは大変な人出、満員のバスがひっきりなしに来る。大変人気のあるコースのようである。

今日はバティー泊まり。明日は終日バスで移動し、カトマンズに行く。

・10月22日（木） ブルブレ→カトマンズ 天気 晴

8:00 ブルブレ出発

16:00 カトマンズ到着

全員無事コスモトレック着。滝沢、江川両氏はトラチャンハウスにむかう。我々3人は「華」で夜食。店長は青山学院大山岳部OBの人で山の話に花が咲く。ホテルに戻って40日ぶりのシャワー！

・10月23日（金）～10月25日（日）
カトマンズ滞在 天気 晴

カトマンズにて、休養、荷物整理、EMS発送、市内観光。

郵便局でのEMS発送手続きは意味不明の検査料、前時代的な梱包方法など貴重な経験であった。

夜は華で食事。

・10月26日（月） カトマンズ→ダッカ→香港→関西国際空港

夜カトマンズを出た飛行機はダッカ

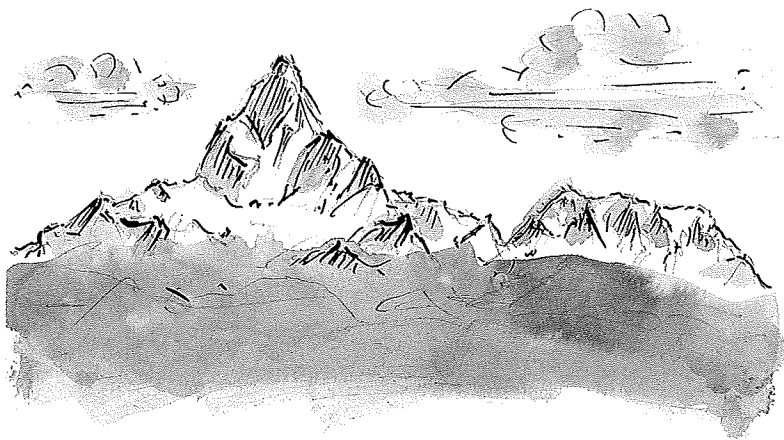
を經由した。「ダッカ」とは我々の年代にはなつかしい地名である。深夜であったので地形や景色はわからなかったが、大きな空港のようであった。こんな深夜に比較的空いていた座席がほとんど埋まってしまった。乗客は大半がスーツ姿にカバンを持ったサラリーマン風の人達であった。この人達は朝7時過に着いた香港で降りた。アジア経済の国を越えた人の流れの一端を見た思いであった。

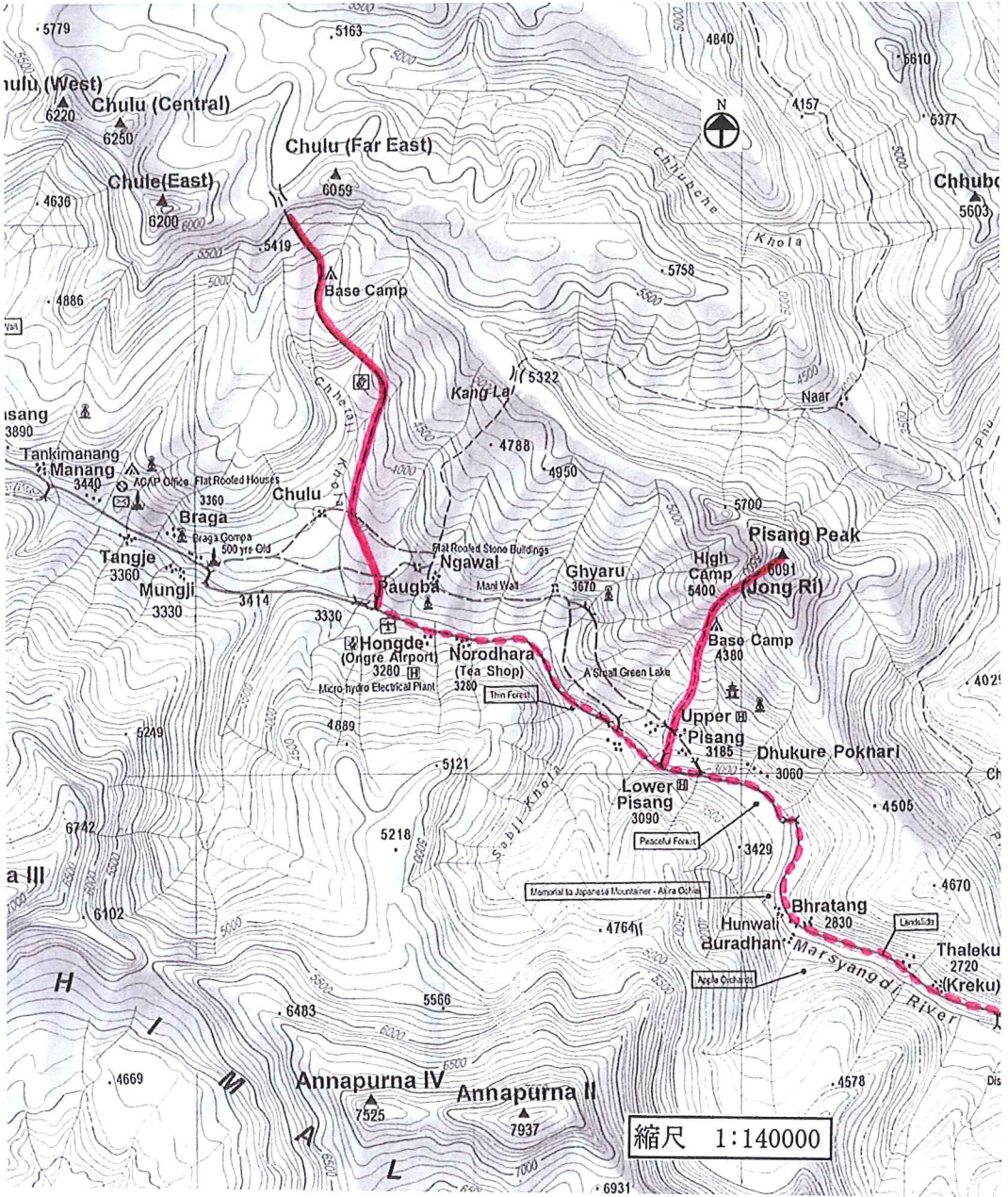
そして3人揃って大過なく関空に到着したと思ったが、最後の最後に、落

ちがついた。最終ゲートを出てホッとした途端、係官が駒井に近づいてきて「麻薬捜査犬が、あなたのザックに反応したので、捜査に協力してほしい」とのことで、3人別々に個室に入れて隅から隅まで、手帳のページの間まで、きっちりと調べられた。

駒井は靴の裏の土まで資料として採取された。

3~4日前に、大麻草を触ったことがあり、そのときザックににおいが着いたものと思われるが、日本の麻薬捜査犬の優秀さに感動した。





各係報告

タクティクス

小林 元紀

〈計画〉

中高年の隊員にかかる負担を極力軽くして安全登攀を第一とする。ベースキャンプから上の荷上げ、ルート工作、FIXはガイド主体で行うが、隊員も体力の余裕の範囲で行う。また、C1、C2のエッセンは隊員自ら行うこととする。

ピサンピークは高所順応を主体に十分時間をかける。極地法でC1、状況に応じC2を設営し、FIXは積極的に使う。登攀期間は10日間として、登攀できなくてもチュルーへ移動する。

チュルーはBC、C1まで全員で高度順応なしで行き、チームを2班に分ける。佐藤、山内はC2を設営しイーストを目指す。駒井、神野、小林はファーストをC1から目指す。

登攀活動中は環境問題に十分配慮し、発生したゴミは焼却せず全て持ち帰ることとする。

ピサンピークの登攀活動が終わるころ、第三チームアンナプルナ周遊トレッキング隊がピサンBCに高度順応を兼ねて支援に訪れる。

そして、チュルー登攀活動終了後、

駒井、神野、小林はナルコーラを遡上しプーガオン奥の第一チームのBCへ激励キャラバンを行う。佐藤、山内はバックキャラバンに入りポカラに向い、第三、第四チームに合流して小川追悼式典に参加する。

〈活動結果〉（行動概要図参照）

ピサンピークはほぼ計画通りに進んだと思っています。標高840mのブルブレから3,200mのピサン下村まで5日間のキャラバン、翌日高度順応のため標高4,000m地点を往復しゆっくりとした休日をとった。BCに入った日にさらに200mほど、C1に入った日に300mほど、C2に入った日に100mほどそれぞれ往復したこともあり、高度順応は大変うまくいったと思う。若干の頭痛程度で行動に支障が出る状況にはならなかった。

高度が上がるにつれ1日に行動できる高度差は5～700mが限界であった。ベースキャンプから山頂まで2,000m弱の高度差がある。当初予定はキャンプ一つで、サードも強くそれを主張する。キャンプを二つ出すよう時間をかけて調整した結果、ガイドは5,100m地点でのキャンプ、我われは4,800m地点と、5,400m地点にキャンプを設



営することで合意できた。これが登頂できた最大の要因だと思う。

チュルーは天候悪化により撤退したが、当初予定と異なった点は以下の通り。

- ・ベースキャンプに入るのに2日要したこと。ポーターが下に戻るためには一日で上がってしまうと帰りに無理があるようであった。打ち合わせ不足であった。
- ・全員C1まで順調にいったが、2座のFIX工作のためガイドを二分することはできなかった。フィックスの日程を別途入れておくべきであった。

〈国内で3回の準備合宿〉

第1回目

平成21年3月20日～22日

乗鞍高原「ふれんず岡崎」をベースに、耐寒、高所順応、アイゼンワークの習得。

参加者 神野、小林、駒井、佐藤夫妻、池内

21日、快晴に恵まれ、位ヶ原から乗鞍山頂を目指しクラストした稜線を直登する。

アイゼンワークと頬が痛い位の寒風を

受け良い訓練となった。

第2回目

平成21年4月27日～29日

上高地岳沢上部をベースに、田辺、花谷両ガイド指導のもとロープワークの習得。

参加者 金子、神野、小林、駒井、佐藤、花谷、江川、藤松、滝沢、池内
講師 田辺、花谷

アッセンダーを使つての登攀、エイト環を使つての下降、宙吊りロープの登・下降、クレパスでの救助法などの基本訓練を習得。盛り沢山の内容であった。繰り返しの練習で身につけておくことが大事。

第3回目

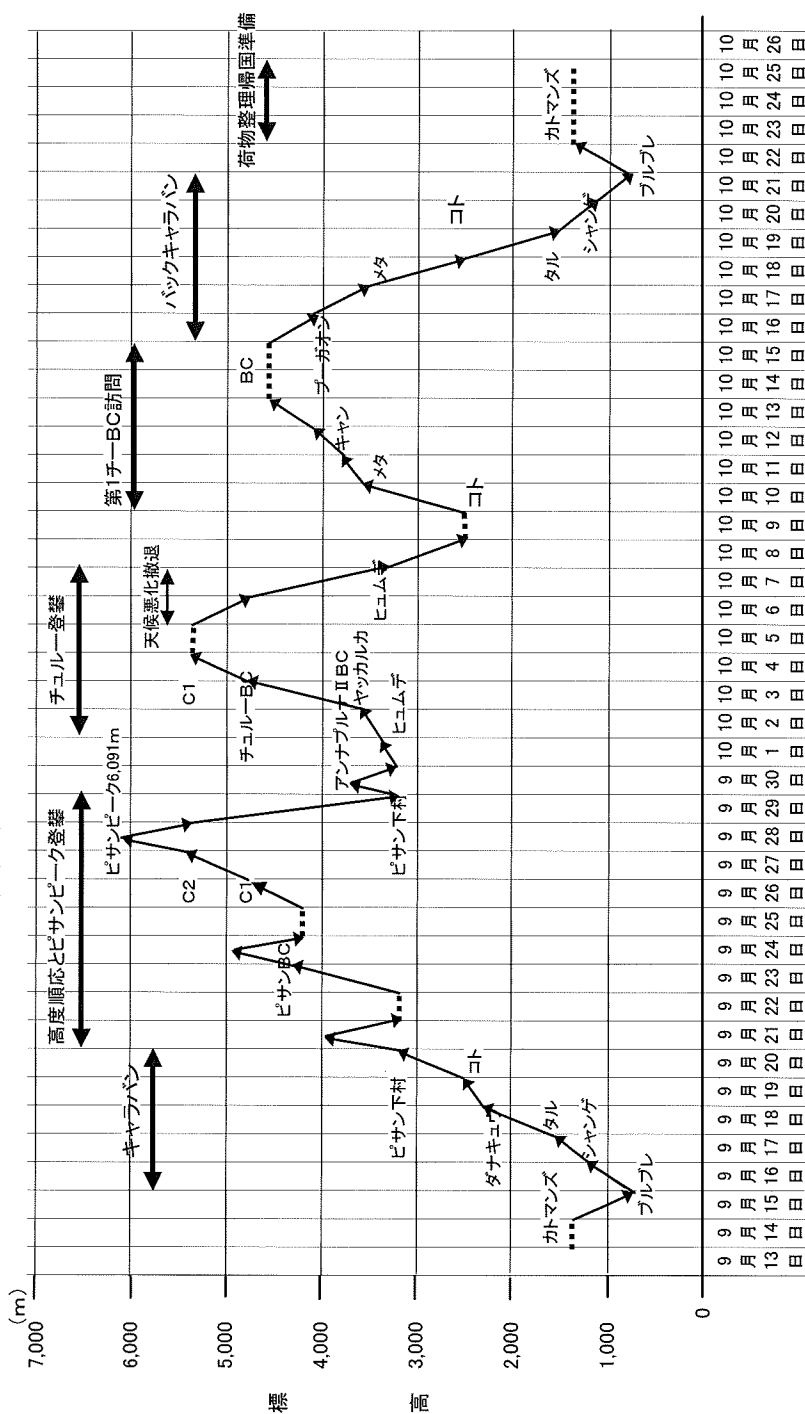
平成21年7月4日～6日

富士山山頂でテント泊して高所における各自の体調チェックを行う。

参加者 金子、神野、小林、駒井、佐藤、山内、日高

山頂の残雪の上でロープワークの復習、強風の中テント設営、アタック食の試食をおこなう。若干の頭痛を体験。

第二チーム行動概要





輸送・梱包

山内 哲文

〈国内〉

梱包作業は、大阪の山内隊員の会社事務所を貸していただいた。事前に各自の個人装備や、団体装備・食料など送り8月7日（土）8日（日）に都合のつく人たちで梱包作業を行った。事務所を貸していただいた会社には大変感謝する次第です。

食料関係…フリーズ・ドライ食を中心にした食料は軽量ではあるが、包装は大変過剰である。ゴミの持ち帰りや、ハイキャンプでの炊事の容易さを考慮して包装は最大限はがすこととした。朝・夕食はテント別・食事別まとめて1パックに梱包した。また、行動食は個人別にピサン用とチュルー用に分けてそれぞれ1パックとした。

梱包…プラパール4箱に食料、団体装備、個人装備等分配して1箱最大18kgを目安にした。後日山内隊員がEMSで発送した。1週間程度でカトマンズ大津さんから到着のメールがあった。順調な様子であった。

〈現地〉

個人装備は各自のダッフルバックに、団体装備、食料は現地調達のキャラバン用資機材と一緒にしてポーターに運搬してもらった。各自は水と雨

具・カメラ程度を背負ってキャラバン。

〈帰路・カトマンズ〉

団体装備、機内超過の個人装備等プラパールに詰め込んでEMSで日本に発送、領収書のない意味不明の手続き料のおかげで短時間のチェックで関門通過、前時代的な厳正な包装をして発送、日本に帰った翌日に荷物は家に着いていた。

装備

駒井 浩

・個人装備…別表「個人装備一覧」参照

隊員たちの多くは日本の四季の山々を登ってはいたが、本格的な厳冬期登攀からは遠ざかっていたこともあり、個人装備の調達には戸惑う事が多かった。幸い経験豊かな仲間から貴重な意見を参考に結果してほとんどすべて新調することとなった。登山靴、ヤッケ上下、アンダーウエアはじめ防寒具などちょっとした「花嫁衣装」並みの出費であった。

腰道具について、アッセンダー、カラビナ、シュリングなど上高地岳沢のザイル訓練合宿を参考に調達した結果、特段の支障はなかった。アイゼンは国内で使用していたもので問題なく、ピッケルも昔なつかしきウッド

シャフトタイプは馬鹿にされて登らせてもらえないこともあると脅されていたがOKであった。対象の山の程度によるのであろうと思われた。

小物で便利であった物

- ・携帯用ウォッシュレット…乾電池式でちょっと重かったが、快適でペーパーの節約、清潔感など申し分なかった。共同装備でもよいと思う。
- ・オシッコボトル…必需品であるが、1.5~2ℓはほしかった。
- ・浄水器…ちょっと不安であったが、結構使えそうであった。

そのほか個人装備では特段の不都合は感じられなかったが、重要なことは「使い慣れておくこと」「こまめに整理する」「どこに何を入れたか記憶しておく」ことなどが大変肝要です。欲しいときに欲しいものが出てこなくザックやダッフルバックの中を探しまわることは高所では大変に疲れることでした。

- ・団体装備…別表「団体装備一覧」参照

食料と同じくほぼフルハンドリングに近い山行スタイルであったので、装備についても事前にコスモトレックと十分な調整の上、キャラバンからアタックまでのほぼすべての調達は現地

スタッフにお願いした。ただ、アタック食は自分たちで調理するのでこれに必要なコッヘル、火器等は日本で用意し、ガスボンベは現地調達とした。

結果以下のような感想である。

- ・キャラバンのテントは1人一張りの時代！ 長旅で個人装備の出し入れ、探しものに疲れてしまう。
 - ・前後して多くの西欧のパーティーとキャンプしたが、彼らのテントはどれも新品そのものであった。
 - ・アタックテント、雪の上では下からの浸水があった。ブルーシートがほしかった。
 - ・ガスボンベはガイド分も含めて小を20個用意した。結果これは大変少なくガイドがアタックキャンプを出さずにBCに下ることがあった。テント一張り1晩2個が雪・氷を溶かして水を作る時の目安と後に教わった。
 - ・電池式のランタンは軽く操作はスイッチ一つで真に便利であった。食事テントでガイドがこれをあてにして重いガスボンベを上げない時があったくらい。
- トイレットペーパーは日本から大量に送ったが今は現地品でも十分使えるものであった。一昔前とは隔世の感！

団体装備

NO	品名	数量		備考
		コスモトレック	2隊準備	
1	隊員用トレッキング及びBCテント	3		
2	ネパール用トレッキング及びBCテント	1		
3	隊員用高所テント	2		
4	ガイド用高所テント	1		
5	ダイニングテント	1		
6	キッチンテント	1		
7	トイレ用テント	1		
8	ツェルト		2	
9	寝袋+ウレタンマットレス	隊員用 5		
10	食料・石油コンロ・石油	○		
11	キッチンセット・ガスランプ・銅釜など	○	コッフェル2	
12	トイレトペーパー		1式	
13	FIX	2,000m		
14	スノーバー (シュリングつき)	○		
15	アイスクリュウ	○		
16	ハーケン	○		
17	カラビナ	○	○	
18	プリムスガス	○		10本
19	メインロープ	○		
20	無線機		3台	
21	衛星電話 (レンタル)		1	
22	ビーガン		1	
23	パソコン		1	
24	ソーラ充電器		1	
25	スノースコップ	○		
26	スノーソー	○		
27	ロックハンマー	○		
28	スノーバー用シュリング	○		
29	高所テント用竹ベグ	○		
30	標識用赤旗		○	
31	標識用竹	○		
32	高所用コッヘルセット・敷き板		2	
33	ガスバーナーヘッド・敷き板		2	
34	気象トラッカー		1	
35	双眼鏡		2	
36	乾電池単3		○	
37	乾電池単4		○	
38	充電器+充電型乾電池単3		○	
39	充電型乾電池単4		○	
40	コンバイン袋		○	土嚢袋 (高所雪袋)
41	医薬品		一式	
42	熟大メイト・ポラール		5組	
43	血圧計		1	
44	パルスオキシメーター		2	

個人装備

NO	品名	数	注記
1	アタックザック	1	
2	大型ザックまたはダッフルバック	1	
3	ダッフルバック用袋	1	
4	厳冬期登山靴	1	
5	アイゼン	1	
6	オーバーシューズまたはロングスパッツ	1	
7	トレッキング靴	1	
8	ピッケル	1	
9	ストック	1	ダブルのほうが多かった
10	ヘルメット	1	
11	ハーネス (安全ベルト)	1	
12	安全環付カラビナ	2～3	
13	カラビナ	3	
14	8環	1	
15	ユマール	1	
16	タイブロック	3	
17	シュリング	3	
18	高所帽	1	
19	目出帽	1	
20	ウインドヤッケ	1	
21	オーバーズボン	1	
22	羽毛服	1	
23	フリースシャツまたはセーター	1	
24	アウターシャツ	1～2	
25	インナーシャツ	2	
26	アンダーシャツ	2～3	
27	冬用ズボン	1	
28	トレッキング用ズボン/半ズボン	1～2	
29	アンダーズボン 下着	1～2	
30	パンツ	3～4	
31	トレッキング用靴下	2～3	
32	登山用靴下	2～3	
33	オーバーミトン	1	
34	手袋	2～3	
35	雨具 (上下)	1	
36	雨傘	1	
37	ヘッドランプ	1～2	
38	予備用乾電池	上記予備	
39	シュラフカバー	1	
40	エアーマット (高所用)	1	
41	銀マット	1	
42	高所用食器	1セット	
43	水筒	1	
44	テルモス	1	
45	テントシューズ	1	
46	ゴーグル・サングラス	1	

その他個人装備

NO	品名	数	注記
1	パスポート	1	
2	パスポートサイズ写真	2～3	
3	パスポートのコピー	2～3	
4	地図	1	
5	磁石	1	
6	時計（高度計付き）	1	
7	カメラ デジタル	1	
8	カメラ（フィルムタイプ）	1	
9	トイレットペーパー	3～4	
10	おしり洗浄機	1	
11	ナルゲン（おしっこボトルに使用）	1	
12	日焼け止めローション	1	
13	リップクーム	1	
14	タオル	2	
15	洗面用具	1	
16	石けん・シャンプー・リンス	1	
17	ナイフ	1	
18	爪切り	1	
19	綿棒	1	
20	洗剤	1	
21	小物類	1	
22	電卓	1	
23	個人常備薬	適宜	

食料

小林 元紀

食材、火器、燃料、鍋釜の調達、調理、洗い物全て現地（キッチン・ポーター）に一任することで進めた。ただしハイキャンプでは自分たちで調理することでもあり、食べなれた日本食で元気を出そうとのことで、フリーズ・ドライ食を中心に日本で調達したものを持参した。

ハイキャンプでの食料は、参考書（山溪、海外登山）などを参考に一日の総

カロリー2,500kcal以上を目標にした。食材は高齢者向きにのどごしの良い流動食中心に組み合わせを考え、4月岳沢合宿、6月富士山合宿で試食しメンバーの希望を取り入れた。

(1) キャラバン、ベースキャンプでの食事

お米中心の食事で、我々にとっては食べやすい食事であった。のり巻や冷麦風スパゲッティなど細やかな気配りが感じられた。ふりかけやお茶、漬物などを日本から持っていけば良かった

献立表

食事回数	品名	メーカー	重さ (g)	熱量 (Kcal)	たんぱく質 (g)	脂質 (g)	炭水化物 (g)
朝食 (A) 6日分	野菜コンソメリゾット	レガー	70.5	254	4	0.6	58.1
	けんちん汁	アマノフーズ	8.5	37			
	海草サラダ	リケン		50			
	お茶+漬物			少々			
	ミロ (スプーン3杯)		15	60			
	砂糖(スティックタイプ)		5g×2	40			
				〈105〉	〈441〉		
朝食 (B) 7日分	トマトリゾット	レガー	74	266	5.4	7	59.4
	豚汁	アマノフーズ	14	61			
	海鮮サラダ			50			
	お茶+漬物						
	ミロ		15	60			
	砂糖		5g×2	40			
				〈115〉	〈477〉		
夕食 (A) 6日分	FDちらし寿司	サタケ	77	285	5.3	1.6	62.4
	岳食・味噌煮込みうどん	レガー	60	318	13.9	3.8	57
	味噌汁			30			
	海草サラダ	リケン		50			
	お茶+漬物			少々			
	ミロ	ネスレ	15	60			
	砂糖		5g×2	40			
			〈165〉	〈783〉			
夕食 (B) 7日分	FD白飯	尾西食品	100	366	6.3	1.1	82.7
	牛丼	ジフィーズ	19.3	91	4.1	4.2	9.1
	岳食・にゅうめん	レガー	83	258	9.3	1.3	52.2
	海草サラダ	リケン		50			
	お茶+漬物			少々			
	ミロ	ネスレ	15	60			
	砂糖		5g×2	40			
			〈230〉	〈865〉			
行動食 14日分	①チーズケーキ	明治製菓	40	196	2	11	22.2
	②チョコレートケーキ	明治製菓	40	191	2.2	10.5	21.9
	③ミルクケーキ	ネスル	36	200	1.3	11.6	22.4
	④乾燥果物		80	270	0.6	0	67
	⑤アミノヴァイタル (粉末1ℓ用)			108	3	0	24.1
	⑥飴玉						
	⑦ミルクココア (粉末)			68			
			〈200〉	〈1,050〉			
おやつ	乾燥しるこ		46	169			
	カップラーメン		100	400			

※A-2,300kcal + おやつ B-2,400kcal + おやつ

と思う。朝・夕食がちょっと寂しかった。

キャラバン中の間食（おやつ）、これは現地食では作ってもらえなかった。日本から用意すべきものであった。キャラバン中の空腹にはちょっとこたえた。

(2) アタック食—基本パターン—（献立表参照）

- ・朝…リゾット+汁物、サラダ、漬物、お茶、ミロ — 約500kcal
- ・昼…行動食、機能性菓子、乾燥果物、飴玉、ココア — 約1,000kcal
- ・夜…FD白飯+牛丼、うどん、漬物、お茶、ミロ — 約500kcal

これだけでは一日2,500kcalには不足するので、カップラーメン、伊那食品提供のカップスープを行動後のおやつとして準備

反省…2回の合宿で試食などした献立ではあったが、高所では食欲の減退でほとんど食べるができなかった。

例えば、ピサンC2では夜はアルファ米(100g)に牛丼で十分であった。翌朝はスープ1パイだけであとはのどが通らなくアタックに出ることになった。そして登頂後の夜は2つのうどんを3人で食べきれなかった。

行動食は特段の問題はなかったと思う。氷砂糖は口の中がさっぱりしてなかなか良かった。今回の食料はキャラ

バンならばGoodなものだったと思うが、ハイキャンプでの食料としては改善の余地有りであった。

医療

佐藤 邦彦 山内 哲文

医薬品は全て日本で調達したものを持って行った。先輩が経験に基づいて高山で罹患の恐れある多くの症状の対処医薬品と、服用に当たっての注意書きもいただき大変心強かった。年をとると各自それぞれ持病薬や飲み慣れた薬があり、体調不良時はまずはそれらで様子を見てから、だめだったら共同装備の医薬品ということになります。結果して全員大きな怪我も病気にもならず、大きく医薬品のお世話になることもなく何よりであった。

罹患した主な症状

- ・高所における頭痛、吐き気
- ・咳、痰、口内炎
- ・下痢

使った主な医薬品

- ・ダイアモックス…少々、効果は若干?
- ・インドメシククリーム…凍傷予防という効能書きであったが、筋肉痛などの鎮痛剤として使用。メンバーの多くが多量に使用。
- ・ロペミン・ナウゼリン…下痢止め。

医薬品とその服用法

呼吸器	PL顆粒 1包 メジコン 1錠 ムコソルバン 1錠 1日3回 食後	総合感冒剤 鎮咳剤 去痰剤
	ブロコデ液 1日3回 適時	鎮咳剤液 注射器にて原液2mlを 水5mlにて希釈する
抗生剤	セフゾン 1日3回 食後	セフェム系 (第2世代) 症状がややひどい時
	クラビット 1日3回 食後	ニューキノロン系 症状がもっとひどい時
	ジスロマック 1日2錠 3日継続	マクロライド系 症状がさらにひどい時
抗ウィルス剤	タミフル 1日2回 5日継続	抗インフルエンザ剤
消化器	ロペミン・ナウゼリン 各1錠 1日2回	整腸剤・下痢止め
	ムコスタ・ブスコパン ストロカイン 各1錠 1日3回	胃腸の炎症時 計 4セット
	グロリアミン顆粒 1包1日3回	胃粘膜保護剤
鎮痛剤	ソレトン メチコパール	腰痛等 筋肉痛 1日3回食後 28セット
	ロキソニン	解熱・鎮痛剤 適時
凍傷予防	ユベラニコチネート 1日3回まで 適時	抹消血液循環改善剤
	ヒルドイドソフト イドメシクリーム	併用して患部に摺りこむ
高山病	アセタゾラミド	ダイアモックス 250mg
	利尿剤	ラシックス 20mg (フルイトラン 2mg)
	ステロイド	デカドロン 0.5mg
	降圧剤	アダラートL 10mg アダラートL 5mg
	狭心症	ニトロール舌下錠
	頭痛	デパス 1mg
	睡眠薬	マイスリー 5mg
	経口電解質剤	ソリタ T3号顆粒

- 1: 高山では 呼吸器感染症でなくても空咳がよくある
- 2: 高熱がでて インフルエンザを確信した時は タミフル1日2錠5日間継続して服用
他の人も感染をうたがえば 同様服用 症状のない人は予防的に1日1錠5日間服用
- 3: 呼吸器感染症を疑えば 抗生剤を併用する
軽度であれば セフゾン 1日3回 肺炎症状なれば クラビット 1日3回 数日服用
重症なれば ジスロマック 1日1回2錠 3日間とする
熱発により 脱水が進行するから水分補給に留意する
- 4: 下痢・脱水の場合 ソリタ T3号顆粒1包を 水100mlに溶解して飲用する (電解質の補正)
発熱があれば 細菌性胃腸炎を疑い セフゾンもしくはクラビット 1錠 1日3回併用する
- 5: 創の場合 セフゾン 1日3回 4日間とする

脱水症対策	水100mlにソリタT3号顆粒 1包を溶解して 適時飲用する 電解質 (Na、K、Cl) の補充となる 口渇感を覚える前に 補給するのが肝要です
高山病	(A) 予防には ダイアモックス 1錠 就寝時 数日間服用 利尿作用を期待するのではなく 過呼吸による呼吸性アルカローシスの 改善である 腹式呼吸を行うのも有効と思われる 頭痛時 デパス1mg 屯用 副作用に注意
	(B) 軽度傷害時には ダイアモックス 2錠 朝夜 服用 水分補給が充分なされているにもかかわらず 顔面 下肢に浮腫が 認められた時 ラシックス20mgにて 利尿を期待する 脱水状態での乏尿でなければ 追加服用も可能である その場所が安全であれば 睡眠導入剤 マイスリー 5mgも有用である
	(C) 高度傷害とは 脳や肺の浮腫症状と考える いずれも ただちに下山して安静が最重要である 酸素吸入 加圧バッグがあれば 積極的に利用する (I) 脳浮腫 1: ダイアモックス 2錠 朝夕2回の服用を継続する 2: デカドロン 0.5mg 1日3回服用 3: ロキソニン 1錠 適時 屯用 (II) 肺水腫 1: ダイアモックス 2錠 朝夕2回の服用を継続する 2: アダラートL10mg 1錠 翌日からアダラートL5mg 1錠服用する 3: デカドロン 0.5mg 1日3回服用 4: 利尿剤 この服用には 禁忌とする文献もある その理由は脱水状態で利尿を 促進させ全身状態をより悪化させるためと記されている 上記薬剤服用し下山しても症状が悪化する場合は 緊急避難として 前記電解質液に砂糖を適量加えて 多く飲料させるとともに ラシックス20mg 1錠を服用させる 1時間経ても尿がでない場合 さらに 1錠追加する 水分摂取は継続する 必ず 利尿がつき症状は軽快する
	(D) その他 激しい胸痛時 ニトロール舌下する 飲み込まず舌下にて溶解を待つ

ガイドもお世話になった。

- ・ソリタ T3号顆粒…高山病対策として水筒の水に溶かして飲んだ。

個人医薬品

- ・ショコラBB…食事が合わなかったのか口内炎になり、これが劇的な効果があった。
- ・UVカットリップクリーム…日焼け止めに普通のリップクリームでは

唇が火ぶくれのようになってしまいが、UVカットはすぐれものであった。

- ・紅景天…高山病予防薬として駒井隊員が服用をつづけ、高度5,600mまで何の高山病の予兆が無かった。漢方薬系で若干入手手続きが手間どるようであるが、次の機会に別の人の使用結果を期待したい。

その他

・山岳科学研究所の依頼で熟大メイトを付け行動したが、心拍計が大いに役立った計測器であった。中高年にとって体力の限界を自分で目安とする心拍数を超えないよう行動できるのは大変心強いものであった。

・他に血圧計とパルスオキシメーターを高山病の度合いをチェックに使ってみた。

ピサン登攀を終えてフムデに行ってから、朝の安静時の血圧が100-180というような経験したことのないような高い値になってびっくりしてしまった。衛星電話で新谷医師に相談の結果高山ではありうることで心配いらぬとの宣託に一同安心したものでした。

情報・通信

山内 哲文

現地での情報伝達手段として以下のものを使った。

スラーヤ…衛星電話で現地と日本の国内情報担当松崎氏との日々の行動報告、非常時の救援依頼、留守本部への連絡等のために用意。地形の影響

は受けたが、コンパクトで日本への日々の行動報告には大変便利なものであった。ただ、ネパール国内同士での通話はうまく通じないことが多かった。

ビーガン…画像伝送、パソコン通信ができ便利な道具であった。パソコンとセットで使うもので、日本での身近な出来事をタイムリーに知ることができまことに結構でした。

日の下でのパソコンは画面が見づらかった。新聞記事など加工してメール原稿を作ってくれた金子さんには感謝！ 感謝！ であります。

この器械も地形の影響は受け、さらにセッティングに時間を要するので、キャラバン中など行動日に使うことはためられた。結果使う頻度が少なかった。

トランシーバ…我々のアタックテントとBCのガイドとの連絡や夜間のテント間の連絡に重宝した。予備を含めて3台持って行った。

ソーラーパネル・バッテリー…各通信機器の充電に使った。フル充電にかなり時間を要する場合があった。相性があるかも知れない。が、必需品であった。

会計

山内 哲文

収入

個人負担 40万円×3、30万円×2	1,800,000
小川山岳基金拠出（個人補助）	1,400,000
計	3,200,000

支出

渡航費 125,000×5	625,000
輸送費 EMS（梱包材含む）	157,044
食料費	115,247
装備費	39,018
山岳保険（ihi、577\$×5）	271,190
雑費（タクシー代）	7,040
コスモトレック	1,980,204
〃 精算	18,000
計	3,212,743

差額は個人負担で処理。

なお、以下の費用を本部で負担願った。

通信機器レンタル料、通話料	693,000
高所テント他（現役寄贈）	236,251
計	929,251

その他

個人装備の調達に各自40～60万円以上の支出を要した。

改めてヒマラヤで使える用具はと考えると、日ごろ日本の山で使っているものは心もとなく、登山靴からヤッケ、防寒具、腰道具などほとんどすべて新調することになり予想以上の出費であった。小川山岳基金からの助成金は大変ありがたかった。



ヒマラヤ山行を終えて

小林 元紀

「ピサンピークはトレックピークの中で一番難しい山だ」とサーダーのラムカジ・タマンさんが言ったのは年寄り組へのお世辞なのか、登れなかった時の慰めなのかはわかりません。私は時間切れ寸前に辛くも登頂できました。が、途中の記憶が定かでないのです。教科書に書いてあるような、頭痛、吐き気などの症状はなく高度順応は比較的うまくいったと思う。食欲が無くほとんど食べることができなかったのが夢遊病状態でなかったかと思っている。記憶にあるのは、あられのような雪が降り、斜面を雨のような音をたてて落ちていく。目の前のロープはまっすぐ上に伸びてその先はガスで見えない。アッセンダーを両手で握って一歩登って一呼吸二呼吸そしてまた一歩、誰も姿が見えない。みんなとっくに先に行ってしまったようだ。傾斜が緩くなったと思ったらガスの中に人の塊が見え、そこが頂上であった。時間切れ寸前で皆帰ろうかと思っていたようであった。写真撮影もそこそこにアッセンダーをエイト環に付け替えて脱兎のごとく下った。基礎体力の無さを実感

した次第です。

しかし、この山は下から山頂まで全く腰を降ろす場所もないほどきつい登りの続く山である。サーダーのラムカジ・タマンの言う事もうなずける。

一方、チュルーは溪流沿いの穏やかな道、ヤクカルカ、きつい登りを過ぎ広々としたベースキャンプに着くという変化に富んだルートであった。またC1も池のほとりでキャンプでき、そこからは山頂の展望ができ山頂までのルートも目で追える場所であった。時間さえかければ楽しんで登れそうであった。天候の悪化で撤退したことは誠に残念であった。

ガイドがフィックスしてくれたロープを頼りに登る年寄りのこんな山行を、記念行事の一環として認め多大の支援をいただき関係各位には全くもって感謝そして感謝であります。しがたない勤め人にとって、長の休みを取って山登りなんてリタイアしなければできない話です。山に入れ込んだ友人が「山やめますか？ 会社辞めますか！」と上司から言われたことがありました。むべなるかなであります。そして

たっぷりと時間が取れる頃は体力が衰えています。岳沢の合宿で花谷、田辺両氏にザイル訓練を受けましたが、手は攣る、足は攣るで訓練にならないのであります。60を過ぎた者のヒマラヤ山行はこんな山登りが妥当でしょう！

私にとってのネパールは、15年ほど前のジョムソンからカリガンダキ川を下ってタトパニからプーンヒルに至る10日ほどのトレッキングが初めてでした。

プーンヒルから見たダウラギリ、アンナプルナなどヒマラヤの峰々の素晴らしさと、一方足元の不潔にまみれた極貧状況の庶民の生活とのギャップに大変衝撃をうけたことが強く印象に残っています。

今回は前回の免疫も効いていたので大変スムーズに現地の生活に溶け込めたと思っています。そして一ヶ月を超える山旅を通してネパールの印象は前回と異なり何か好きになってしまいました。思いつくまま印象を記す。

〈携帯電話〉

こんなに広く使われているとは驚きだった。狭い谷の中でアンテナ局の姿がどこにも見えないのに、さらに局に送る電柱さえ見えない。そもそも電気があるのかとさえ思ってしまった。ガイドはカトマンズへたびたび電話をしていた。ブルブレの宿の娘さんはカ

トマンズの大学からデザインの休暇で帰って来たとか、携帯電話に送られてきた画像を家の人に見せて談笑している。自分よりいい道具を持っている。日本では山の行ってちょっと谷に入ると携帯が圏外表示することに慣れている身にとっては驚きであった。日本は遅れているのだろうか？

〈袖の下〉

帰路バスがなかなか進まない。途中何度か意味不明の停車があった。いくつかの村ではお祭りの時期であるようで、村の人が幟旗をたて村を通過する車を止め、ご祝儀を請求しているようであった。笑顔で差し出すのがよい。決してマオニストなんかではない。古き良き伝統文化だ！ カトマンズに近いところでは警官が交通整理か検問か車を止めている。運転手がいろいろ書類みたいなものを見せているがらがが明かない。最後には何かを丸めて警官の手に渡して車は通過。カトマンズの郵便局で日本へのEMS手続きの際、荷物容検査に手心をさし出せば短時間で済むとの話であった。言われた料金を支払った。領収書も釣り銭もなしで手続きは短時間で済んだ。手続きの済んだプラパールは木綿の袋に包んで針と糸で四隅を丁寧に縫って、さらに縫い目にローソクで融かした？ みたいなもので封印してくれた。荷物は日本に帰った時には無事着いていました。

あの検査料金は前時代的な包装代に違いない。袖の下なんかでは無い事にしよう。

〈清潔はビヨウキだ！〉

ブルブレからマルシャンディー川を遡ってピサンまで数多くの村々を通りました。コトからプーガオンまではさらに小さな村を通りました。

トレッカー相手の立派なホテルと称している宿は別にして、多くは見るからに貧しそうな家々が目立ちます。どこからか引いた一本の黒いホースから出る水をみんなが共同で使っている。ナベやカマを洗い、顔を洗い、頭を洗い、体を拭いている。そして飲み水に。

牛やヒツジ、ニワトリ、犬などと人間が同じ空間で同居している真っ暗な家の中から真っ黒に煤けた子ども

が出てくる。意外と子どもたちの肌は艶々している。健康そうである。食料不足、栄養不足から想像される姿とはちょっと異なる。なつかしき涙垂れ小僧もいた。

日本人が好む清潔志向が進んでみんなが無菌状態になりアレルギー性疾患が増えている状況を「清潔は病気だ」と喝破した学者がいたが、これもむべなるかなである。

カトマンズを出て戻るまで一ヶ月以上シャワーもせず、頭も洗わず、下着は高所用と里用を着替えただけ、腕まくりをしたらフケみたいなのが舞い上がった。10日も過ぎたら気にならなくなり、なんとなく艶々したような現地人になった気分であった。帰ってから入浴を繰り返すうちにあちこち痒くなってきた。やはり「清潔はビヨウキだ！」よい勉強をした！





ヒマラヤと私

駒井 浩

45年前、当時個別に登山活動を行っていた信大山岳会に、故小川勝君をはじめとするメンバーが地域の枠を超えて「海外登山研究会」という組織を立ち上げた。

そのメンバーの中に、「駒井 浩」の名前があった。

しかし、わずか数ヵ月後、その名前はその名簿から消えた。

つまり私は、「大学山岳部に入っているだけでも心配なのに、国際情勢も不安な海外はやめてくれ」という母の言葉に、海外登山をあきらめたのである。

海外登山をあきらめると、研究会に入っているのは癪に触るのでメンバーから外れた。

以来、最初の小川君たちのトレッキングを始め、その後の遠征やトレッキングに関心を持ちつつ自分は行動しなかった。

そして、遠征の記録・報告を見たり聞いたりするたび、日本国内では経験できないものへの憧れを感じていた。

それは、自分で勝手に名づけた「三ひょう」、すなわち、1つめは「標高」、2つ目は「氷河」、3つ目は「雪豹」である。

今回、60周年記念事業の話が始まっ

たときから、今度は参加しようと思っていた。

家族も母も、このたびは応援してくれた。

「3ひょう」のうち、3番目の雪豹はいかに動体視力が良くても、素人が簡単に見つけられるものではない。

そこで、これは、王子動物園の雪豹を見ることで代用した。

あとは、標高と氷河を体験することである。

朝日新聞で高所順応の対策として、「生命紅景天」なるものを服用する記事を見つけた。

早速調べた結果、あらかじめカプセルの服用を続けて体質改善（漢方薬と同じ）したほうが良いと考え、ピサンアタックの日に照準を合わせてその20日前から服用を始めた。

別の理由で登頂は断念したが、私の最高到達点（5,600m位）まで、私の体質に適合したのか、次のような高山病の症状は一切出なかった。

〔頭痛、吐き気、眠気、めまい、朦朧感、手足のむくみ、睡眠障害、運動失調、食欲不振、倦怠感、虚脱感、放屁、胸の圧迫感、下痢、安静中の呼吸が荒く脈が速い、睡眠時の咳が激し

い、視力の低下等]

高山病の症状は自覚しなかったが、高所による酸素希薄の影響は、ちょっとした動作による息切れ等、体験した。

今回の遠征におけるピサンアタックの日は、私が胃癌で4/5を摘出手術した日から、ちょうど2年で、その間抗癌剤点滴等で思ったように体力が戻っていないため、はじめてワコールの筋肉補助下着を購入した。

そこで私は大失敗をした。

通常、衣類を含め登山道具は、遠征前に十分慣れて使いこなしておかねばならない。

しかし、これに関しては、夏で暑かったせいもあり購入時に着用したのみで、後は無意識に効果があるものと期待していた。

結果は、私のやせ細った筋肉をしめつけて尻と足の筋肉は痛み、右足を引きずる状態になった。

ピサンのBCへ向かう日から着用していたのであるが、この服のせいとは露疑わず、逆に頼りにしていた。

ピサンBCから下山して脱いだのであるが、翌日はまだ尻と脚が少し痛んだが、次の日からすっかり治ってしまった。

もちろん、ピサンアタックをあきらめざるを得なかったのはこのせいだけではなかったかもしれないが、「道具を使いこなす。そのために慣れてお

く。」という最も基本的な心がけを怠った結果は痛かった。

ピサンとチュルーを終え、第1隊のベースキャンプに激励に行き、パングリ氷河の中へ下り立ったときは、改めて「ああ、ヒマラヤに来てるんだなー」という思いを新たにし、氷河の氷を自分の手で削って、かじった。

今回の遠征では、トレーニングはしていたものの、術後で自分のペースを失っていた。登りでは、その私が付いていけるペースで山内君が先導してくれた。また、チュルーで全員が「第2隊の目的の一つは駒井をピークに立たせることだ。全員でファーイーストにアタックしよう。」と言ってくれたときは本当にうれしかった。あいにく天候に見放され、ほうほうの体で逃げ帰るはめになり、果たせなかったが素晴らしいメンバーに恵まれたヒマラヤであった。

少々（実はガバッと）未練は残るものの、素晴らしい経験をさせていただきました。

この機会を与えてくださった方たち、応援してくださった皆様、一緒に行動したメンバーに深く感謝しております。

本当にありがとうございました。

最後に、胃の小さい私の食事の対策と結果を報告します。

私は胃が1/5しかない。

従って一度の食べられる量は限られている。御飯だと150gまでである。

コンビニのお結び（100g/個）を、1度に2個食べると、たとえゆっくりよく噛んでいても、腹が詰まって1時間ぐらいウンウン唸ることになる。

とはいえ人並みに腹は減るし、エネルギーが不足するから、普段から1日6回～7回食事している。

今回、ヒマラヤで食事をどうするか？

対策として考えたのは、1日当たり次の通り摂取することである。

- ・6Pチーズ 1個
- ・加糖練乳 65g
- ・黒糖 2個
- ・チョコレート 2個
- ・蜂蜜 1/2チューブ
- ・栄養サブリ 1/3チューブ
- ・干果物 少々

また、朝昼食の一部を別に包んで持って歩き、行動中でも腹に入れることである。

44日分ともなると、毎食後のむ薬と食料だけで中型の段ボール1杯になった。

そして現地では、なるべく予定通り、朝食、行動中（朝食のナン等）、昼食、おやつ、夕食、夜食のリズムで通した。

守れないこともたびたびあったが、それを気にせず、補うことに重点を置いて食生活を心掛けた。



ヒマラヤへの憧れ

佐藤 邦彦

私がまだ小学校の高学年の頃だったろうか。父が写真週刊誌「毎日グラフ」を買ってきた。それは榎 有恒隊長率いるマナスル登山隊の特集号だった。今でもはっきり思い出すことができる。茶の間で横になって毎日毎日ページを繰ってネパールの山と人々の姿をながめた。大人になったら自分もそういう登山をしたいと思ったわけではないがその時の隊員は私にとってヒーローで今でも名前と出身大学まで覚えている。

南極観測もその頃だったと思う。第1回は永田 武隊長、西堀栄三郎越冬隊長で観測船“宗谷”のニュースのとりこになった。宗谷が南極海の厚い氷に閉じ込められて動けなくなり、アメリカやソ連に救援を求め砕氷船グレーシャー号やオビ号が宗谷に向かっていくなどのラジオニュースをドキドキしながら聞いたものだ。第1回越冬隊員の朝日新聞佐久間記者はアマチュア無線技師で電波を通じて伝えてきた南極のニュースに強くひきつけられた。こうして私の頭に未知なる世界と電波への興味、関心が刷り込まれたようだ。

こうした思いが信州の山と自然への関心となり 信州大学の通信工学科への進学につながった。勉強はしなかったが良き友に恵まれ四季を通じた登山

は楽しかった。ヒマラヤへ行くことなど夢の夢であったが 長野県岳連のギャチュンカン登山隊の登頂成功は強い刺激になった。その頃3つに分かれていた山岳部が統合され海外登山研究会なる会が出来た。その成果が67年の小川、望月、米倉と私の4名によるネパールワンダリングとガネッシュ、ニルギリ山群の偵察だった。ネパールでは登山禁止の時代で登山こそ出来なかったが4ヶ月に渡るヒマラヤの山旅を堪能した。横浜からフランスの貨客船でコロomboへ、インドの南端に渡りネパール国境まで汽車、そしてカトマンズまではバスを利用した1ヶ月の旅だった。飛行機の利用など高額でも考えられなかった。

あれから40余年が経ち大学と山岳会が創立60周年を迎えた。ここ10年余り海外の登山を続けてきたがまた昔の仲間とこの度のヒマラヤ登山が出来たことは幸せなことだった。40年ぶりに再会した昔の仲間が疎遠にしていた私を受け入れてくれたことが嬉しかった。機会があればこの仲間とまた行きたい。何が私をヒマラヤへ引きつけるのか分からないが今年74歳になる山の先輩が今もヒマラヤ通いしていることに勇気付けられる。

私とヒマラヤ

神野 国昭

信州大学創立60周年記念事業の第2チーム（マナンヒマール登山隊）のメンバーとして、2009年9月13日より10月26日までヒマラヤ登山へ。

9月13日カトマンズ着。

9月18日キャラバン中で急な斜面をロバが立往生しているのをポーターがロバの荷を持ち斜面を登らせていた。きっとロバはポーターを信頼しただろう。私もポーターに対して安心感がわいてきた。

9月21日14時にピサン下村着、頭痛がひどく、なかなか眠れない。何回も小便をし、水をどんどん飲む。その後はよく眠れたようだ、頭痛がおさまっている。

今日の予定は高度順応のため4,000m位まで行く。9時5分出発、登るにつれ南側にアンナプルナの白い大きな塊と氷河が見える。チュルとピサンピークは雲に隠れている。風がやや強い、登りつめて行く、息が荒くなる。今まで写真でしか見ることができなかったヒマラヤが今私の目の前にある。うすゆき草やいろいろな木々や花々なんとすばらしい世界だろう。タルチョのある稜線までくると風が非常に強い。4,000m近くでシェルパのアンダワさんは歩く速度をおとしてくれ

るが私の息はどんどんあがる。霧は深く風は冷たい、富士山より高い所を歩いている。昨日なれたはずの鈍痛が現れる。気温もそうとう低い、手袋をつけ上着を着る。この高度での登山は私には未知の世界である。

9月23日、今日はベースキャンプまで登る予定である。8時7分出発12時35分ベースキャンプ到着、キッチンスタッフがマンゴジュースを持って来てくれたのを飲んで昼食をとり明日への高度順応のためにさらに上に登る。14時30分4,400m位でピサンピークとアンナプルナⅡ峰が美しく見える広い場所に第2隊全員で小川勝君の慰霊碑をケルン状にして作り合掌する。

9月24日今日は第一キャンプまで行きベースキャンプに戻る予定。8時33分出発4,400m過ぎより勾配のきつい草原になる。ゆっくり進んで行く、ピサンピークがだんだん大きく高く感じられる。写真をとろうとカメラを覗くが部分しか入らない。人間の視野の広さは素晴らしいと思う。12時00分第一キャンプ到着、4,800m位だ。ここまで来るとさすがに植物は生えていない。私と佐藤さんは高度順応のため5,000mあたりまで行くことにするも山内さんはすでにシェルパ達とデボ予

定の5,100mに向かって行った。12時48分ガレ場のトラバースがきびしい。13時50分5,000m地点に到着、ここからのアンナプルナⅡ峰もすばらしい。ヒマラヤのピークを踏むことは自分自身の確信をもって意志をつらぬきとおさなければならないだろうと感じる。

9月26日5時ごろテントを出て見ると、みごとな星空に囲りの山々がうっすらと浮かんで見える。7時55分全員が火のついたチョルテンの祭壇に米をささげ安全に祈りをする。昨日降っていた雨がうそのような快晴にめぐまれた。山内さんは脈拍数を一定に保ちながらゆっくりと歩く、その後を駒井君が安心してついていて、良い風景だ。第一キャンプ近くでは前面に雪のかぶった大きなドーム、5,500m以上あるのだろう。谷を挟んで右側は穂高の岩稜を連想させる尾根が連なっている。ガレ場の中を尾根筋沿いに進んで行く、難しい山と思われる、ピサンピークは。

9月27日今日は第二キャンプ5,400mまで行く。6時00分起床、昨日は雷が鳴っていたし、雪も降っていた。16時18分テント到着。別のテントで小林さんと山内さんがエッセンの用意をしてくれている。明日はいよいよピサンピークのアタックだ、楽しみと恐さが入り混じっている。

9月28日4時00分出発、ピサンピーク頂上12時30分、テント到着16時00

分。昨日高度障害が激しかったのでダイアモックス2錠飲みかなり良くなったので今朝も2錠飲む、佐藤さんも飲んでいよいよ出発。サーダーのラムカジさんがアンダワさん他2名のシェルパと登ってきて第2隊と合流しアタックへ、登っているうちに駒井君が右足に激痛が走り、これ以上無理すればみんなに迷惑がかかるとピサンピークを断念した。心の痛みはそれ以上だっただろう。進んで行くうちに全面雪の斜面が現れる。トップがフィックスをしながら前進して行く、私達はユマールを使いピッケル、アイゼンで進む、非常に苦しい、雪がとぎれた所ではきびしい岩場のトラバースである。そこを通り過ぎると大きな雪田である。直登して行く、シェルパの強さは別格だ、私は一歩ずつ、何も考えないでただ一歩ずつしか進めない、しかし進んで行くということは、やはり頂上に着くことを意味している。上のほうで山内さんがカメラを向けている、頂上が近いと感じると元気がでて来る。登りきるとなだらかな雪の稜線が頂上まで続いている。9月28日12時30分は私にとって最初のヒマラヤピークの記念と時間になりました。

10月11日チュルでは大雪に見舞われて撤退を余儀なくされて今日は第1隊と合流するため、ここコトより出発、プーコーラを進んで行くとアンナプルナ連峰をバックにピサンピークが美し

く、気高くそびえている。深い溪谷である。

10月13日第1隊と合流、10月14日10時24分第1隊のヒムルン登頂の報告を聞き10時42分より藤松先生の案内で氷河を見にゆくことに、まず急な斜面を下り第1隊が整備したルートをたどって行く。ギャジカンの大きな様相とピラミッドのようなネムジュンを目の当たりにしながらの進行である、遠くには今日登頂に成功したヒムルンも見える。11時40分氷河がむき出しになっている断面に到着、その固さはまるで岩のようだ。何百mの厚みのある氷河が年間十数mの早さで流れているとのことである。氷河の断面をたたき割って、そのかけらを口にすると悠久の時間が私の口の中で解けた。今私はヒマラヤの核心部に居ると実感できた。出合とは何だろう、何によっ

てこの時間と空間に出合っているのだろうか。

10月17日早朝テントから外に出るとプーガオンがプーコーラをはさんで朝日に照らされまぼろしのように浮かんでいる。

10月21日サンジェにて、昨日寺田さんがなくなったと小林さんから聞いて気がめいる。夕食をすませて表にでてぼんやりと向かい側の山裾を見ているとホタルが淡い光をつけたり、消したりしながら飛んでいました。なんとも寂しいかぎりだ、寺田さんに冥福を。

今回のヒマラヤ遠征ではヒマラヤの自然に圧倒され、ピサンピークの頂上で感激し、家族に感謝をする

これも信州大学60周年記念事業に参加させていただいたおかげです。

みなさま本当にありがとうございました。



感想

ヒマラヤへは、いつか行きたいと思っていた。けど、仕事しながらじゃあ無理だなとなんとなくあきらめていた。そこへ、今回の計画があり、信大山岳会OBであり職場の長でもある、池内さんからの後押しがあった。この機会を逃すと、一生後悔すること間違いない。仕事はなんとかなるだろうと参加することに決めた。予想通り、出発前に仕事を片付けることが最も困難な壁になった。出発前1ヶ月を切ると、それまでに終わらさなアカン仕事の量を考えると、夜布団に入っても落ち着いて眠ることができなくなり、出発前1週間は本当に寝る時間もなくなった。おかげで、出発前のトレーニングは富士山登山3回と六甲山でのザイルワーク数回だけしかできなかった。

このように、体力面で不安を抱えて出発したが、約一週間のキャラバンで、睡眠不足と運動不足をすっかり解消することができた。そして、なによりも、キャラバンが楽しかった。ヒマラヤの魅力の半分以上はキャラバンにあると思う。日本なら雲を見上げる目線の位置に山がある。日本三大大滝級の滝がそこいらにゴロゴロある。急斜面に作られた稲田、そば畑、麦畑や

山内 哲文

そこで働く人々の風景は、どのシーンをカットしてもミレーの絵みたいになる。しかも、荷物は、自分のピッケルや登山靴などの個人装備まで、ロバとポーターが運んでくれる。ここは、「天国への扉、ヘブンズゲート」。

登山活動では、自分の親と同じくらいの年齢とチームを組んで登ることになった。これは自分にとって初めての体験だった。出発前に実は思っていた「我々の体力で、5日のキャラバン、高所順応およびC1、C2設営を経てアタックまで行けるのか？ 正直、無理かも」と。がしかし、結局、我々は誰一人体調を崩すことなく、2つの6,000m峰の登山活動を含む行程を終えて無事帰ってくることができた。私は、60歳を越えてもヒマラヤ6,000m峰に登ることができるだということを目の当たりにすることができた。これを可能にしたのは、隊員全員が、「絶対に無理はしない！ でも絶対にあきらめない！」という行動を自然にとることができたからだと思う。

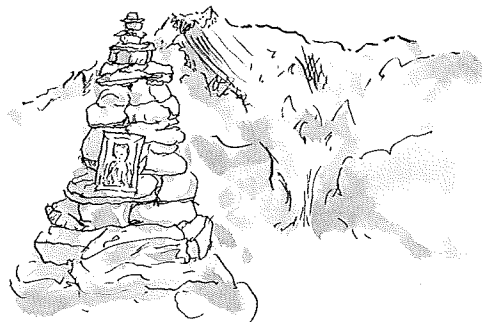
カトマンズ〜ピサンBCへ着くまでは、自分達の持てる力の範囲を少しも超えることなく、それでいて、着実に歩を進めていくという感じであった。もし自分ひとりだけだったら、はやる



気持ちを抑え切れず、ガンガン行き過ぎて高度障害か下痢かでダウンしていたに違いない。BCから先は、C1だけでアタックをかけるというラムカジさんの提案するタクティクスを、臨機応変に、うまいこと交渉して、自分達の体力に最も適したタクティクスになるようC2も設定するようもっていったのは見事だったと思う。アタックの日だけは、さすがに無理をせざるをえなかったけれども。チュルーは、登れなくてとても悔しかったが、結果としては、あれ以上少しでも無理して突っ込んでいたら、撤退不可能な場所で悪天につかって大変な目にあっていたと思う。

何はともあれ、ヒマラヤがこんなに楽しいものだとは思わなかった。もし

も私が学生の頃に来ていたならば、定職につかずにせっせとヒマラヤに通う親不孝者になっていただろう。チュルー最東峰のルートワークで、雪壁をリードしているとき、息がきれぎれの中で、今まで経験したことない山の大きさを身体で感じる事ができた。ピサンピーク登山中に対岸のアンナプルナII峰を見たとき、登ってみたいと初めて山に憧れた。帰りのキャラバンでロキシーを飲んでシェルパ達とひわいな踊りしたときは、一瞬自分は昔からネパール人だったかのように感じた。ピサンピークからBCに降りてきて、そこで第三チームの方々に暖かく迎えられたときは、本当に泣くかと思った。



隊員紹介



小林 元紀

1944年 2月 5日 生まれ 岐阜県 多治見市在住

1965年 工学部 電気工学科 卒

(自己紹介)

見るからに典型的なメタボ体型であります。数年前に心房細動になりアブレーション治療で今は治まっています。今回のヒマラヤ山行で再発しなかったことが大いに自信になりました。

世の中の出来事から離れて年金生活の身ですが、かつての職場の仲間たちと各地に観光を兼ねた山登りを楽しんでいます。最近はみんな高齢になり回数が少なくなってきたのがちょっとさみしい思いです。



駒井 浩

1943年 3月10日 生まれ 兵庫県 神戸市在住

1970年 工学部 土木工学科 卒

(自己紹介)

2年前、癌により胃の4/5を摘出しました。現在もなお点滴による抗癌剤治療中ですが、担当医の許可をもらって今回の計画に参加しました。ヒマラヤにおいては高山病の症状も一切出ず、また、44日間、体調不良もなかったことをうれしく思っています。

登頂は果たせませんでした。アタックまで引っ張ってくれた仲間や応援して下さった方たちに感謝しています。



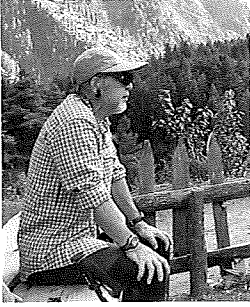
神野 国昭

1943年10月21日 生まれ 兵庫県 芦屋市在住

1966年農学部卒

(自己紹介)

登山暦50数年日本森林ボランティア協会員として山と接点を取りながら近くの六甲山(931m)と親しんでいます。入山回数は2000回ぐらいになります。



佐藤 邦彦

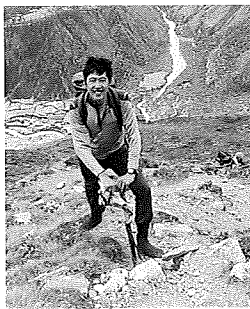
1943年 4月 1日生まれ 福島県 郡山市在住

1967年 工学部 通信工学科卒

(自己紹介)

67年仲間4人と憧れのネパールで4ヶ月トレッキング。その後生活に追われて登山休みや忘れていた。10年余り前里山散策中、昔の登山を思い出し以後毎年のように海外の山を目指している。

仕事(幼稚園の雑務)をクビにならない程度にサボって妻と山、スキー、温泉巡りを楽しんでいる。夢は8千米峰登頂とグランモンテ(シャモニー)をスマートに滑降すること。



山内 哲文

1974年10月21日生まれ 兵庫県 神戸市在住

1999年 理学部 物理科卒

(自己紹介)

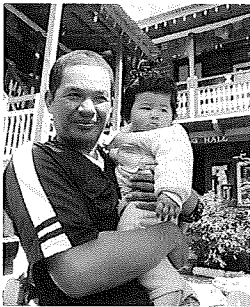
日本では、ヒマラヤに行く前も行った後も、たまりにたまった仕事に追われて、一日中夜遅くまでパソコンに向かって仕事をする日々を送っています。日常生活と山での生活のギャップが非常に大きく、まるで、現実と夢の世界を行き来しているような状態です。帰りのキャラバン中、食堂でダルバットを食べていると、そこのにいちゃんが、私を現地人と間違えてネパール語で「おかわりいるか?」と尋ねられる程にネパール人化していました。

スタッフ紹介

山内 哲文



4人のクライミングシェルパ



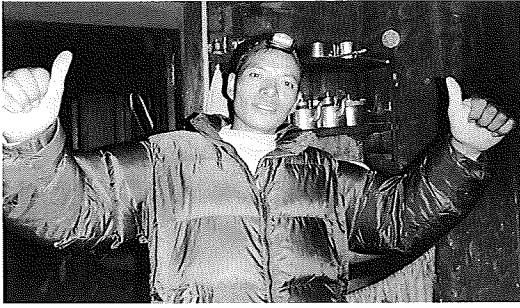
サーター：ラムカジ・タマン（34歳）

日本語が堪能。いつも笑顔を絶やさず、人当たりがとてもよい。道々、ネパールについていろいろ教えてくれた。そして行く先々の宿の女将さんにモテていた。カトマンズに妻と娘がいる。一年のうち半分は登山ガイド、オフシーズンは日本等へ出稼ぎ等して暮らす。早月小屋で働いていたこともあるという。お兄さんは、信大ラトナチェリ隊のシェルパだったツルさん。お父さんもクライミングシェルパだったらしい。



クライミングシェルパ：ティカ・タマン（38歳）

ティカさんのクライミング技術には、ラムカジさんも一目おいている。クライミングスクールのコーチもしているらしい。他のシェルパから「ティカダイ」（ティカ兄貴、ティカ親分とかいう意味と思われる）と呼ばれていた。ルートワークではリーダー的存在で、ザイルさばきに無駄がなく、ガンガンリードしていた。下山後、宿でロキシーを飲みながら「我々はいいいチームだった。また、機会があればクライミングしたいね。」と言っていたのが印象的だった。



クライミングシェルパ：アンダワ・タマン
(37歳)

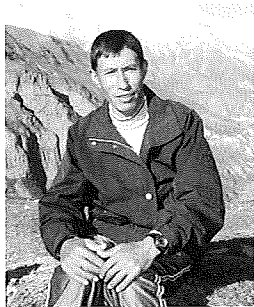
牛なみの体力を持つアンダワさん。チュルーBC撤退のとき、私の二倍ぐらいの荷物を背負って駆け下りる様は本当に牛のようだった。荷物の積みすぎと飛ばしすぎのため、背負っていた荷物だけが斜面に転げおちていった、彼は叫んでいた。ラムカジさんのような器用な営業ト

ークはできないけど、誠実な仕事ぶりの印象を受けた。町にいるときはほぼ失業状態だが、奥さんの実家が山奥で畑やヤギや鶏がおり、そこへ帰ると朝から晩まで働かなければいけないそうだ。



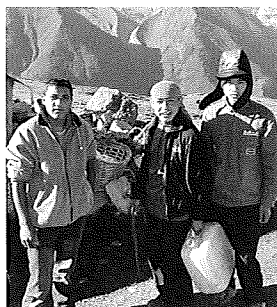
クライミングシェルパ：ダワ・タマン (31歳)

4人のシェルパの中で一番若く、元気いっぱい。キャラバンで泊まった村々で、その宿で一番きれいな女の子と仲良くなっていたようだ(写真参照)。でも奥さんはちゃんといるらしい。「なんでガイドになったん？」と聞くと「んー。親父もガイドやってたし。やっぱ他に仕事ないしね。危険だけど稼げるから。」と言っていた。



コック：ミンマ・タマン

素朴な職人の雰囲気をかもしだしている。穏やかでやさしい目をしている。「ミトツァ」(おいしかったよ)と言うと、いつも、しみじみと「ダンネバ」(ありがとう)と返してくれる。巻きずし、ピザ、ロールケーキ、アップルパイなど、あんな野戦キッチンみたいな設備でどうやって作ったのだろうと思うものをたまに作ってくれた。味噌汁などの日本食は微妙にネパールテイストだった。最初「ミンマジー」(ミンマさん)と呼んでいたが、そのうち小林隊長が「爺(じい)」と呼ぶようになった。

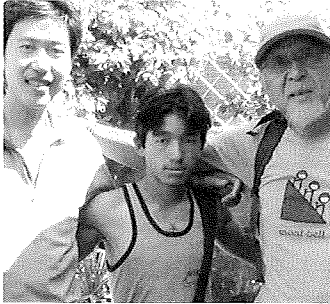


キッチンボーイズ (4名)

写真左からパッサム、サントス、アウツシュ、もう一人のパッサム

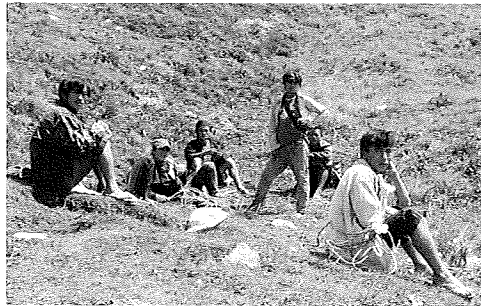
全員10代後半～20代前半で若くてパワフルだった。キャラバンでは我々が出発した後、彼らは残ってキッチンを撤収してから、道具食材一式を背負って我々を追い越していき、昼ごはんの場所に先についてキッ

ンを設営して食事を作る。みんなで歌いながらご飯を作るのが好きらしく、キッチンからはよく歌声が聞こえていた。必要とあらば、高所の荷揚げも手伝ってくれる。サントスは20歳なのに子供が3人もいるらしい。



ポーター頭：シエテ・ラマ・タマン (17歳)

荷分けをめぐるポーターどうしの言い争いは毎朝日課のように行われていた。シエテ・ラマはいつもその中心にいて、「お前、それぐらい文句言わんと持たんかい!!」とか威厳をもって言っている様子であった。12歳と15歳の弟もポーターとして参加していた。トレッキングのガイドもやっているらしいが、高所ガイドになる気は今のところないらしい。



ポーターズ

ポーター 16名のうち、大半は10代後半で、2名だけ30代または40代と思しき人がいた。この2名は40kgはあると見られる荷物を背負っていた。ロバだと一頭あたり60kg程度運べるらしいが、崖崩れ等で道が崩壊していると立ち往生するし、村からBCまでの山道の荷揚げは基本的に無理らしい。ポーター達は、我々とは別の現地人用の宿に泊っていた。宿といっても普通の民家とどう違うのか分からなかったが、電気がない真っ暗な部屋でみんなでカレーを食べ、みんなで同じ部屋で寝ていた。